

長い事更新が滞り、大変失礼いたしました。ご承知のとおり有田町のHPが変更になりました。資料館分もすっかり入れ替えることになりました。それで、その調整期間中は、触るとめんどくさいことになるからってうちの若い衆に脅されて、やむなくアップするのを控えてました。変更後もまだ慣れていないので、アップはまだまだってことで…。自分でアップするわけではないので、仰せの通りにするしかありません。いや、原稿自体はちゃんと書いてあったんですよ。おかげで、すいぶん熟成させてました。ということで、ようやく準備が整いましたので、また再開いたします。

前回は、喜三右衛門さんの技術が広く普及して、みんなWin-Winの関係になったって話をしました。特に喜三右衛門さんの拠点である楠木谷窯跡に近い後の内山地区の窯場では、混じり物の少ないよりピュアな技術として伝わったってことでした。

でも、勘違いされたら困りますので言つときますが、いくら近くでも、まったく振り向かない窯場はあるんですよ。たとえば、楠木谷窯跡と同じ年木山でも、年木谷3号窯跡なんかは、頑なに初期伊万里様式の製品ばかりを作り続けてますしね。まあ、喜三右衛門さんの前に広がった、五郎七さんの技術ですら華麗にパスって感じですから、かなり筋金入りです。きっと、この窯場に関わった人たちって、例の正保4年（1647）の神右衛門さんの運上銀値上げ説得工作の時に、値上げするなら止めるって帰っていった半分の勢力に含まれるんでしょうね。

それはいいですが、じゃあ、逆に楠木谷窯跡から遠い、後の外山の窯場はどうだったんでしょうか？まあ、おおむねご想像のとおりです。ただ、もちろん窯場によって、個性はありますけどね。複雑ではないんですが、理解するにはちょっと頭をひねる必要があります。

どういうことかと言えば、内山経由の喜三右衛門さん技術の影響が大きいか、ミスターXさんの山辺田窯跡の影響が大きいかってことです。単純に言えば。でも、これだと誰も頭をひね

らないですね。少しひねってください。山辺田窯跡の技術というのは、もちろん山辺田のオリジナルな技術じゃありません。ミスターXさんと喜三右衛門さんの技術が混じった技術です。おまけに、五郎七さんまで混じってます。具体的には、白磁素地の五彩手や青手の製品です。つまり、山辺田窯跡で一度ブレンドした技術に、また他の窯場で内山経由の技術がブレンドされるってことです。そのブレンド具合が、窯場によってちと違うのです。

後の内山の中で、後の外山に最も近い位置に当たるのが、西端の岩谷川内山です。そして、逆にその岩谷川内山に最も近い後の外山の窯場が外尾山です。そうすると、多少の距離の違いなんて関係あるの？って思うかもしれません、現実的に、外尾山の窯場では岩谷川内山に類似した製品が多く作られています。中には同じ土型の製品もありますし。ただし、質的にはちょっと及びません。言うなれば、岩谷川内山の劣化版が外尾山です。具体的には、外尾山窯跡や丸尾窯跡などです。こうした窯場は、後の外山では、比較的内山の技術が色濃く反映されています。

ということで、本日はここまでにしときます。（村）

有田の陶磁史 (314)

前回は、喜三右衛門さんの技術が後の外山にはどのように伝わったのかということについて、とりあえず、外尾山の話までしてました。続きです。

その前に、毎回、内山、外山に、**“後の”**を付けるのがめんどくさくなってきたので、省略するためになぜ“後の”を付けてるのか再度説明しときます。それは、**まだ古九谷様式の製品が作られていた 1640~50 年代前半頃には、内山と外山という概念はなく、内山、外山という言葉もなかつたからです。**

ということで、話を戻しますが、前回お話しした外尾山の北側というかお隣に位置するのが、**黒牟田山**です。何度も出てきたので覚えてらっしゃると思いますが、ここが**古九谷様式時**

代には、外山の中核的な窯場で、山辺田窯跡や多々良の元窯跡などが位置しています。

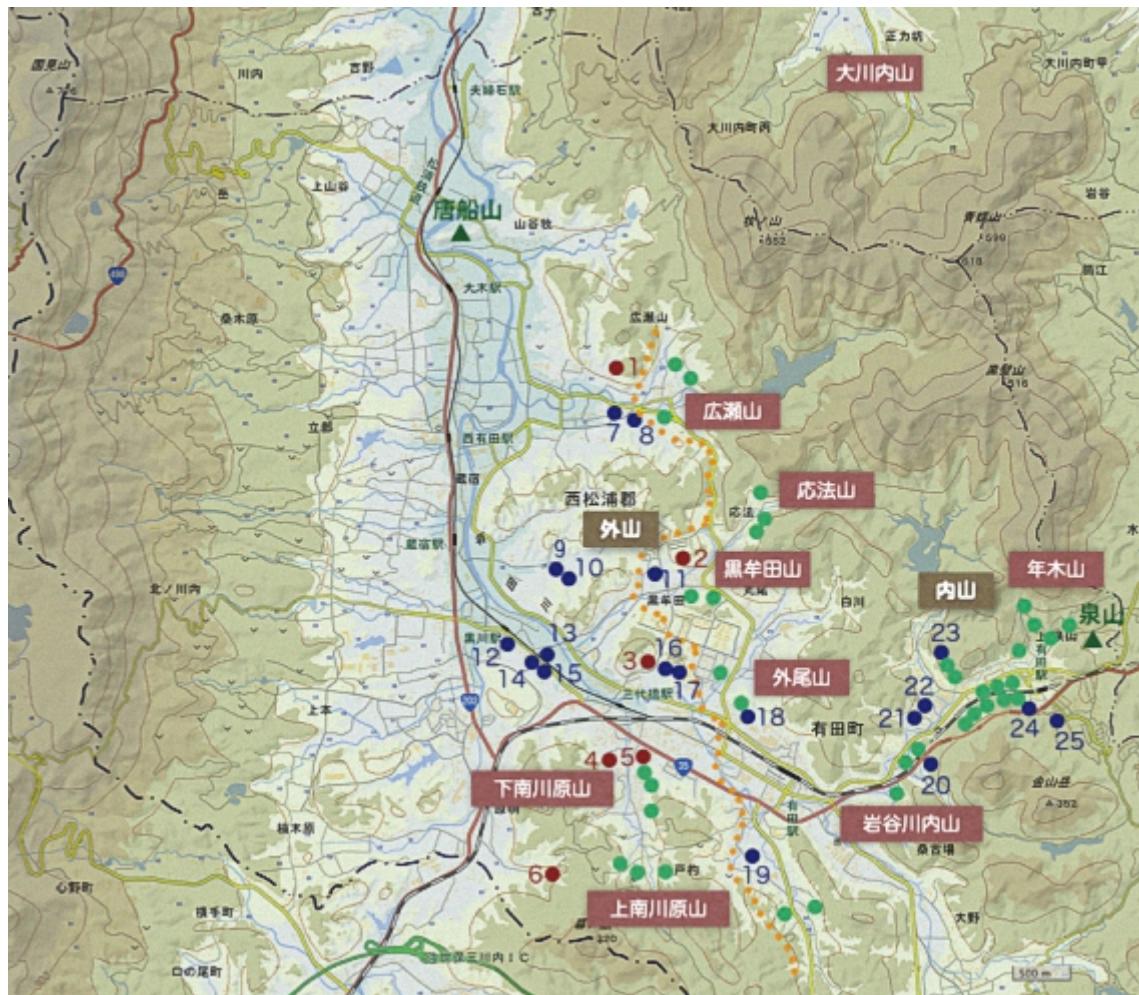
山辺田窯跡についてはさんざんお話ししてきましたが、最初百花手などミスターXさん開発のオリジナル技術が成立しましたが、まもなく五郎七さんの技術も柔軟に取り込んで、祥瑞手由来の技術も、オリジナルの技術と融合させる形で、広く活用されるようになります。生産量では、宗家の岩谷川内山を完全に圧倒してます。そして、その後世間で流行しはじめていた喜三右衛門さんの技術も入ってきました。これによって、山辺田でも白磁素地も生産されるようになります。でも、そこは山辺田も西の雄ですからプライドがありますので、すんなりとは受け入れません。かくして、山辺田の直系技術たる赤絵の具を使わない五彩手や青手が相対的に伝世するような上級品として生産されました。そして、喜三右衛門さん系の赤の絵の具を使うようなタイプは相対的に下級品として生産したのです。

その後、そのごちゃ混ぜになった山辺田の技術が、外山へと広がっていきました。同じ黒牟田山の多々良の元窯跡は、この山辺田由来の技術で古九谷がはじまった窯です。ですから、ここにはその前に普及した、五郎七さん系の製品はありません。

この黒牟田山のお隣（北東）が応法山ですが、ここはまだ古九谷様式時代には窯場 자체がなかったんです。そして、ひと山越えてそのまた北西に位置するのが広瀬山です。ここはおそらく寛永14年（1637）の窯場の整理・統合後、一度窯業界から追放された人たちによって興された窯場で、当時は広瀬向窯跡がありました。ここでも山辺田窯系の白磁大皿が生産されましたが、多々良の元窯跡などとはちょっと生産スタイルが違ってました。それは、この白磁皿の技術が入る前に、五郎七さん系の製品を生産しているからです。内山の窯なんかといっしょですね。

こんな感じで、西側の窯場では、山辺田窯の影響を受けた白磁皿類が作られたのは共通するんですが、まあ、そこに至る経緯はそれぞれってことです。

ということで、本日はおしまい。（村）



外山の山の位置図



広瀬向窯跡の祥瑞手変形皿（表）



広瀬向窯跡の祥瑞手変形皿（裏）



広瀬向窯跡の白磁素地（表）



広瀬向窯跡の白磁素地（裏）

有田の陶磁史（315）

前回までで、古九谷様式の技術の拡散については、粗々とは説明が終わりました。要するに、五郎七さん系の技術が、最初一度バット広がったんですが、その後で喜三右衛門さん系の技術がさらに強力に広がったわけです。ですから、五郎七さん系の影響は完全に途絶えたわけではないけど、全体的には喜三右衛門さん系の影響の大きい技術が、古九谷様式以降の有田の後継技術になったというわけです。

ということで、古九谷様式のおさらいは終わったとは言っても、まだまだしばらくは出てきますよ。技術の伝播を中心に話ましたが、歴史は連続しているわけですから。そう言えば、まだ古九谷様式がどうやって終わるのかって話もしてませんしね。ねっ、おさらいでもしてちょっと思い出しとかないと、話がややこしそうでしょ。

話を戻しますが、こうやって、古九谷様式時代にはほぼ有田の全域の窯場で、古九谷様式の

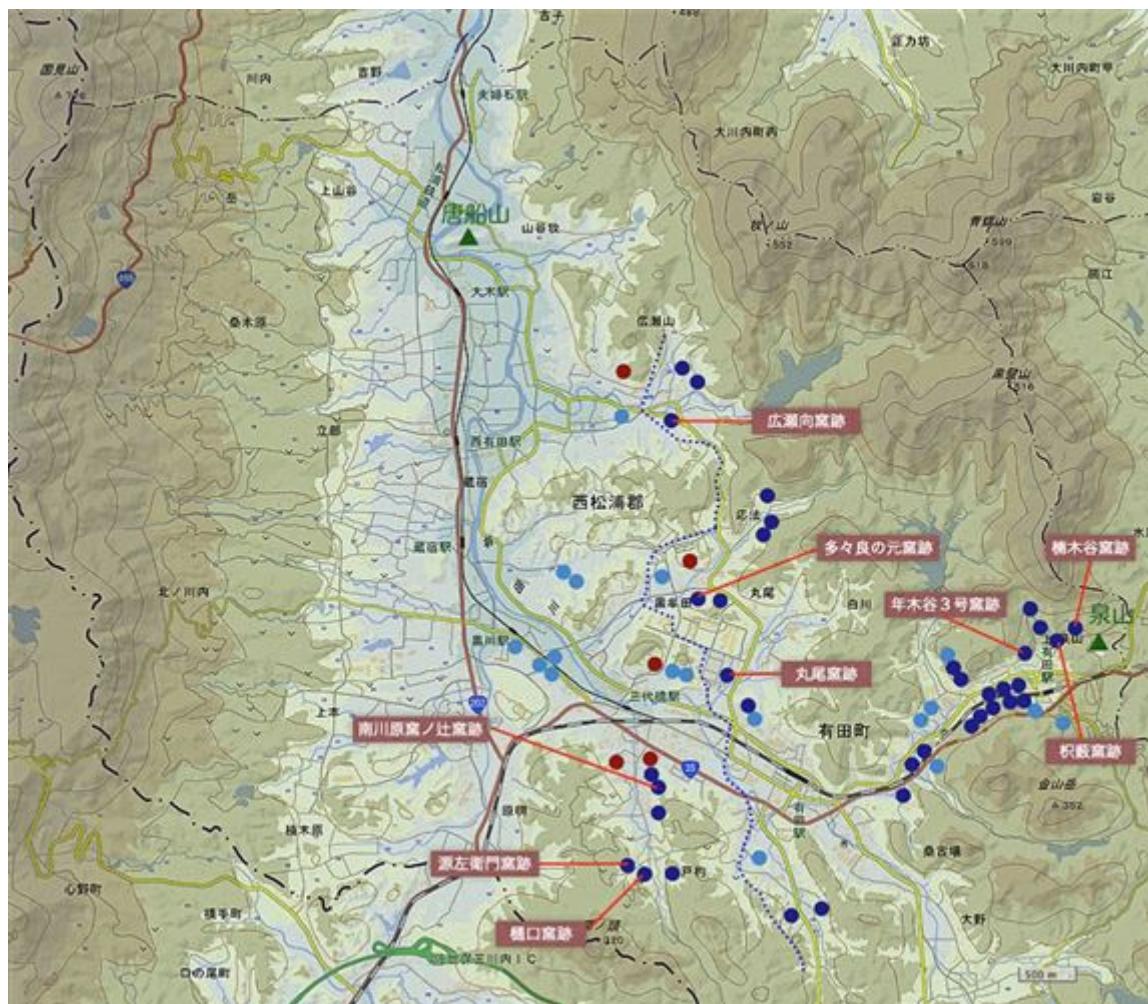
色絵磁器が生産されています。今のところ、地域全部でまったく出土例がないのは南川原山くらいですね。意外ですか？？

南川原山は寛永 14 年（1637）の窯場の整理・統合の際に、一度窯場としては終わってます。でも、この後窯業界から追放された人の中から、「またやらせてよ一つ」て人が現れたんです。藩としても、まあ、藩といつても佐賀のお城くらいまでで、江戸のお殿様はまだまったく関心がなかったんですけど。それは、こないだお話しした正保 4 年（1647）のまた山林大事だから皿屋漬せ騒動を見れば分かりますよね。これはその前の話ですから。続けますが、藩としても陶工は減らしてみたものの、もそっと増やせば、もっと儲かるしな～って皮算用してるわけです。それで、追放した中から、次点で落選したような人たちを選んで、また窯業に再復帰させたんです。その時期とか規模とかは、どこにも書いてないんで分かりませんが、発掘調査すると、だいたい 1640 年前後から 50 年前後頃にかけて増える窯場があります。一つが有田の窯場の南端の南川原山で、下南川原山では南川原窯ノ辻窯跡が、上南川良山では樋口窯跡が興ります。ついでに、源左衛門窯跡ってのもあって、たぶん同じ時期ですが、茶畠が造成されていて、昔は少し陶片もあったんですが、今は何も落ちてませんので詳しいことは分かりません。逆に北端では広瀬山が加わり、広瀬向窯跡が成立しました。それから、既存の窯場では黒牟田山の多々良の元窯跡ですね。それから外尾山では丸尾窯跡。続いて内山では…、う～ん、内山って今の町とスッポリ窯場跡が重なっているので、発掘調査できないところも多いので、あんまりよく分からんんですよ。まあ、上げるとすれば年木山くらいかな。1640 年代中頃に楠木谷窯跡や枳藪窯跡ができて、1650 年前後頃に年木谷 3 号窯跡が開かれるって感じかな。楠木谷窯跡ってのは意外でしょ。古九谷様式で一躍脚光を浴びることになりますが、喜三右衛門さんも最初はその他大勢の一人だったのかもしれませんね。

窯場の分布が分かる最も古い史料は、承応 2 年（1653）の『萬御小物成方算用帳』で、有田の中では 16 の窯場があつたことが分かります。ただし、有田皿屋に属すのは 14 の窯場で、広瀬皿屋と南川原皿屋（上南川原）はそれぞれ独立した皿屋になっていて、まだ仲間に入れて

もらってません。寛永 14 年の窯場の整理・統合の際に 13 の窯場に統合してますので、その後 3 か所増えてますね。まあ、単純に増えたんじゃなくて、入れ替わりがあったみたいですね。

あつ？なんか、古九谷から逆行する時期の話をしまいましたね。とにかく、古九谷様式の頃は、南川原というのはクズ生産の窯場だってことです。ほんと、ろくなもん作ってませんよ。ということで、本日はここまで。（村）



本文中に登場する窯場

前回はちょっと脱線して、窯場の整理・統合以後、陶工の一部が復帰して、窯場が増えちゃたって話をしました。もちろん、その増やしてる頃の横目や代官も山本神右衛門さんですよ。そりや、陶工増やしてガッポリ儲けようとしますぜ。

ところで、山本さんが初代の皿屋代官をしてる頃、やっぱり山本さんにらんだとおり、海外輸出が「もしかしたらイケル？」ってことになってきました。正保4年（1647）にはじめて中国船が輸出したって話をしましたが、慶安3年（1650）にはまだアジアまでとは言えオランダ東インド会社も加わり、将来性抜群ですよ。やっぱ、景德鎮と同等品の古九谷様式作つといて良かったねって話です。初期伊万里のままだと、どっかの国に先越されたかもってことです。

だから、めでたしめでたしって話ではあるんですが、でも、そうするとちと困ったこともあります。本格的に輸出となると、いっぱい買ってくれそうですが、同じもんがいっぱい注文きても作れるかな…？？ってことです。1650年頃って言えば、まだまだ大半の業者は初期伊万里作ってたわけですから。それに、実は、古九谷様式は開発以後順調に生産は伸びてたものの、頭の痛い問題がありました。それは、メチャクチャ技術が複雑化してたんです。

というのは、登り窯の発掘調査すると、1650年代前半の窯では、古九谷様式と初期伊万里様式の製品が同じ焼成室に残ってたりします。つまり、同じ業者でも両方作ってたってことです。こんなもん、技術が混じらないわけないでしょ。古九谷のような初期伊万里のような、へんてこりんなものもいっぱい出てきてたんです。

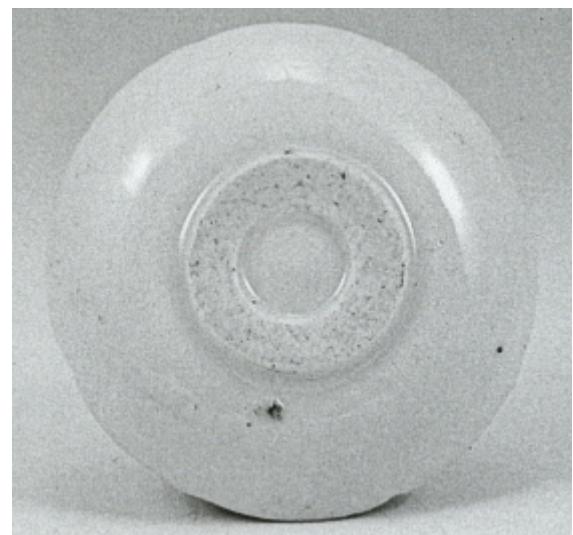
たとえば、実際はもっと複雑ですが、メチャ分かりやすい例を一つ。1640年代から50年代前半にかけて、高台に厚みのある蛇ノ目高台の皿が比較的多く作られています。40年代後半は主に5寸皿が多く、50年代になるともっと小さな手塩皿が中心になります。当然、これはスタイル的には初期伊万里様式です。色絵の開発が1640年代中頃ですから、五寸皿にはほぼ色絵製品はありません

んが、1650年代前半にはかなり普及しますので、蛇ノ目高台の手塙皿の方には、色絵を付けたものがあります。色絵って、初期伊万里様式にはない技法ですから、この点では古九谷様式に含めるしかありません。でも、実際に器形的には初期伊万里様式…。まあ、こんな単純な混ざり方をしてくれればまだ分かりやすいんですが、高台径小さくて高台銘や外面腰部に圈線入れるとか、初期伊万里のくせにばかし濃み使ってるとか、染付製品も含めて、ビミョーなやつがウジャウジャ出てきたんです。それに、今まで初期伊万里作ってて、又聞き又聞きで今度古九谷にトライしてみよってって人もいますしね。当然、持ってる技術は初期伊万里ですからね。これどっちやねんって感じのものがくるはずですよ。つまり、メチャ現場はグチャグチャで、生産体制も製品の品揃えも、まったくスッキリしてなかつたんです。

チャンスをつかみ取ればワンサカ儲かるかもねって状況なのに、こんなのあのくせ者の山本さんがほっとくわけがありません。何しろ窯場の整理・統合の際だって、全部ガラガラポンで民族大移動みたいな大胆なことした人ですよ。ということで、期待を裏切らず、またやったんですよ。メチャクチャなこと…。でも、長くなるので、続きは次回。（村）



蛇ノ目高台の色絵手塙皿（内面）



蛇ノ目高台の色絵手塙皿（外面）

※画像は小木一良『新集成伊万里』里文出版 1993 より引用

前回は、古九谷様式の開発によって、もしかしたら海外輸出イケルかもよって状況になってきたけど、あまりにも内部の体制が複雑になりすぎて、グチャグチャ。そこで、お代官の山本神右衛門さんは、またゴソゴソとやったみたいよってところで終わってました。本日はそのゴソゴソの中身です。

山本さんと言えば、天正 18 年 (1590) 生まれですから、戦国の世を生き抜いたってほどではありませんが、何しろあの『葉隱』にある「武士道と云うは死ぬことと見つけたり」の家系ですからね。私利私欲を捨てて、滅私奉公ってことです。まだまだ気風は戦国ですよ。武士としての死に際をわきまえ、いざという時は潔く散るって覚悟があるので、ハラの座り方がちゃいます。一人では何もできないので、自分は食わなくとも、優秀な人材を厚遇で召し抱えるべしって常々言ってたくらいですから、結構キレるやつもまわりにいたんだと思いますよ。

海外に大量輸出するためには、効率的に大量生産できることが不可欠です。そうすると、現地をよく知る山本さんなら、当然思い当たることがあったはずです。後の外山は、点々と山が分布していますから。

あつ！“山”的説明は前にしましたよね。忘れたかな…？例の寛永 14 年 (1637) の整理・統合の際にできた区分で、窯場の所在するそれぞれの地区のことを言います。なので、一つ一つの窯のことじゃありませんよ。今話してる 1650 年代前半頃だと、たとえば黒牟田山には山辺田窯跡と多々良の元窯跡がありました。この二つの窯場は別の丘陵上に位置していますが、この二つを合わせて黒牟田山です。というのは、この場合の“山”とは、自然地形の山とは違います。人々が生活や工房を営む平地と、登り窯を築くためのその平地に面した丘陵斜面を合わせたものが一つの山です。つまり、山辺田窯跡と多々良の元窯跡は別の丘陵上にありますが、面している平地は同じというわけです。なので、逆に同じ自然地形の山でも、反対側の斜面は別の“山”ってことになります。別の平地とセットになりますからね。

まあ、"山"とはこんな感じです。話を戻しますが、後の外山は山が点々と位置していて、山と山の間はそれなりの距離があります。一方、窯場の整理・統合の際に人工的に町を造成した後の内山は、やや大げさに言えば、山が連続しています。

さて、効率的に大量生産するにはどっちが向いていると思いますか？そんなもん、誰でも分かりますよね。後の内山に決まってます。外山は山単位でしか管理が難しいですが、内山は全体を一つの山的な、つまり一つの工場群として扱うことができますから。山本さんなら、それくらいのことには当然考えたはずです。でも、「じゃ、内山を海外輸出の拠点にしよう！」くらいのことだと、誰でも考えます。でも、何しろハラの座った山本さんですから、そんな生半可なことで終わるわけがありません。

でも、その前に、まだちょっと長くなりそうなので、今日はここで終わりにします。また次回。

(村)

有田の陶磁史 (318)

前回は、きっと代官の山本さんなら、後の内山を海外輸出の拠点にしようって考えたはず。でも、そこは山本さんのことなので、「そんじゃ、今日からここで海外輸出用の製品をいっぱい作らせなさい。」くらいで終わるわけないでしょって話で終わってました。続きです。

当時の有田皿屋では、原則磁器専業ってことまでは決まってましたが、どんな磁器を作るかはそれぞれの業者の裁量に任されていました。まあ、業者っても、窯焼き（窯元）だけじゃないですよ。だって、どこにどんなもんをどう売るかは商人の役割ですから、それも含めての意味です。ですから、前にちょびっと触れたと思いますが、この頃までは、どこでも原則的に一つの窯場の中で、上級品から下級品まで全部生産しています。あくまでも、その窯場なりにってことですよ。南川原山のようなクソ製品ばかり作っている下級品の窯場もありましたが、でも、その中でも、一応ちゃんとした磁器みたいなものから、「これって磁器？陶器じゃないの？？」みたいなものまで、そこなりの製品のランク分け自体はありました。

でも、ちょっと前に触れましたが、一番困るのは、なまじっかバリバリの古九谷様式みたいな最新スタイルが開発されたことで、従来、初期伊万里様式の中で上・中・下に分けられていたのが、バリバリの古九谷様式が上、バリバリの初期伊万里様式が下、なんだかその中間みたいなもんが中つて区分けに変質してたんですね。ところが、中ランクにはいろんなもんがあって、もう収拾が付かない状態になっていたわけです。中の上、中の中、中の下、中の上の上…、とかね。これじゃ、同じものを大量生産したくても、とてもじゃないけど質が揃わないって状態なわけです。

そこで、山本さんグループは、まあ何とも腹の据わった大胆なことを企てました。ご同業者崩いの民間の自主性に任せてても、解決できるはずないですから。当然、自分に不利になることはしませんからね。

そこで山本さんは、まず、後の内山を海外輸出の拠点にすべく、全体をそれにターゲットを合わせた製品の質に平準化することにしました。当時だと、ヨーロッパ向けの製品だと、高級量産品つてくらいのランクですね。だったら、ベースとなるスタイルは、当然初期伊万里様式じゃなくて古九谷様式です。でも、古九谷様式にもいろいろあるけど、まあ、オランダ人には薄くて白いのが好まれるので、そりやまさに喜三右衛門さんちのやつだわってことです。かくして内山、失敬！後の内山では、特に喜三右衛門さんちの技術の影響の強い製品に絞られることになりました。

いや～、今日こそは神右衛門さんの遠大な計画の中身の話をするつもりだったんですが、タイムオーバー。また次回ということで…。 (村)

有田の陶磁史 (319)

前回は、内山を海外輸出、というかヨーロッパを中心とする輸出の拠点にすべく、お代官の神右衛門さんは立ち上がった。ヨーロッパで好まれる薄くて白い磁器は、まさに喜三右衛門さんちの技術が最適。それで、内山を…、後の内山をその影響の強い技術でまとめようって考えたわけです。その方策は…ってところで終わってました。続きです。

で、何をしたか…。思い出してくださいね。何しろ、神右衛門さんは、寛永14年（1637）には、伊万里・有田から826人の人を窯業界から追放し、当時の中核的な窯場もためらいもなく全廃して、藩主にも「山林保護！山林保護！！」ってウソついて、大胆不敵にも新しい窯業地を造り出した人ですからね。山あいの土地を切り拓いて町ごと造つといて、どこが山林保護なんだかって突っ込みたくなりますが、まあ、これだけ聞いても何がすごいのか今イチピーンってこないと思います。分かりやすくするために架空の話をします。

たとえば、一つの登り窯に焼成室が20室あったとしましょう。一人の窯焼き（窯元の社長さん）が2室ずつ持つてたとします。あくまで仮定の話ですよ。そうすると、一つの登り窯に10人の窯焼きが関わっていたことになりますね。たとえば、文献の残るところでは、例の金ヶ江三兵衛さんなんかは、一人で10人の人を雇っていたと記しています。この数字をちょっと拝借すると、10人×10人で、これでこの登り窯に関わる人が、窯焼き10人+雇用100人で110人になりました。じゃあ、またまたまた仮にこの人たちは5人家族だったとしましょう。110人×5人=550人ってなるでしょ。まあ、くどいですけど仮定ですよ。だから、このひとつの窯を別の場所に移そうと思えば、ごく大ざっぱなイメージとして捉えてもらえばいいですが、実はこれだけの人を動かすってことなわけです。実際には、窯場の整理・統合の時には、有田の窯場は7か所廃止しますので、たぶん登り窯の数としては10基くらいでしょうか。すると、550人×10基=5,500人。まあ、当たりでしも遠からず程度の数値ですが、別の窯場に移された人、窯業界から追放された人など合わせて、少なくとも数千人規模の人の生活を強制的に一変させてしまったことになるわけです。当時、有田にどのくらいの数の人が住んでたか分かりませんが、今でも2万人弱くらいの人口しかないところですから、割合的には相当高かったはずですよ。

5,500人がどれくらいの人数か、別の例でも見てみます。たとえば一説によれば、大名の1万石あたりの家臣は平均60人程度だったとも言われています。佐賀藩は、石高に割にメチャ多いですが。それはいいとして、じゃあ大名が国替えになったとして、どのくらいの人が動くかです。先ほどと同じ計算をして家臣の家族が5人だとすれば、1万石あたり300人くらい、家臣の家臣って

のもいるかもしれませんので、当てずっぽうですが100人足して400人ってことにしましょう。なので、5,500人は10万石以上のけっこうデッカい大名が動くくらいの人数にはなるわけです。

しかも、これって神右衛門さんの一存でやったわけですから、えげつないってか、ホントにハラが座ってますね。でも、失敗したら潔く腹くらい切る心構えは常にしているわけですから、怖いもんナシですよ。

いや～、ついつい神右衛門さんの人となりを話してたら、今日はまたぜんぜん話が進みませんでした。ということで、神右衛門さんの秘策は、次回に持ち越しつけてこと。 (村)

有田の陶磁史 (320)

前回は、お代官の神右衛門さんがどれくらいハラの座った人だったかという話をしてたので、神右衛門さんが後の内山をヨーロッパを中心とした海外輸出に最適化した場所にするためどうしたかって肝心の中身に入れませんでした。続きです。

後の内山全体を一つの山というか工場というか一括りにして、効率的量産体制を確立するため、域内の技術を平準化することにしました。まあ、どこの窯場で作っても金太郎飴状態って感じかな。

ところが、そう都合良くはいかないんだな～、これが。だって、現実は、従来の初期伊万里様式アリ、新しい古九谷様式アリ、またまた、その両方がグチャグチャに混じった様式アリで、しかもそれが同じ工房で作られるなど、技術や生産システムが複雑で、もうメチャクチャな状態だったんですよ。まあ、言うなればゴミ屋敷状態。片付けるにも、どこから手を着けたらいいもんやらって感じ…。だからと言って、昨日まで初期伊万里作ってた人に、いきなり今日からバリバリの古九谷様式を作るべしってもできるわけないですからね。でも、策士の神右衛門さんはひらめいたんですよ。例の窯場の整理・統合を応用すればいいじゃーんって…、たぶんね。

窯場の整理・統合は、有田の窯業地域の西側にあった窯場をガバッと廃止して、東側にズボッと移したってやつですよね。でも、今度のはもう一と緻密です。後の内山にあった窯場の中で、ひと

窯全部初期伊万里様式の製品を焼いていたようなところは全廃でよろし。ここまで単純。問題は、一つの窯の中で、初期伊万里様式と古九谷様式が混在する窯が結構フツーにあるんですよ。

でも、この場合、ヨーロッパ向けがメインターゲットなので、当時はかなり高級品寄りの製品じゃないといけないわけです。高級量産品って感じ。そしたら、スタイル的には、原則古九谷様式までで、初期伊万里様式や古九谷様式とのマゼマゼ様式なんかは、ちょっとねって感じ。でも、この人たちも生活かかってるので窯場の整理・統合の時のように追放!!ってわけにはいかんでしょう。それに、窯業止めさせると、運上銀にも響くしね。

じゃーってことでやったのが、民族大移動。ってほどの大げさでもないけど、まあ、それなりにそれなりです。少なくとも窯場の整理・統合の時と同じく、数千人単位の配置換えにはなるでしょうね。バリバリ古九谷様式製作以外の人たちを後の外山に分離することにしたってことです。そうすると、後の内山は純粹古九谷様式の人たちだけが残り、これで技術の平準化が可能になるわけです。頭いいですね。ただし、そんなことズバッとできるだけの胆力があればですけど。でも、それが山本さんの山本さんたるゆえんです。

じゃあ、その結果どうなったかですが、それについてはまた次回ということで。（村）

有田の陶磁史（321）

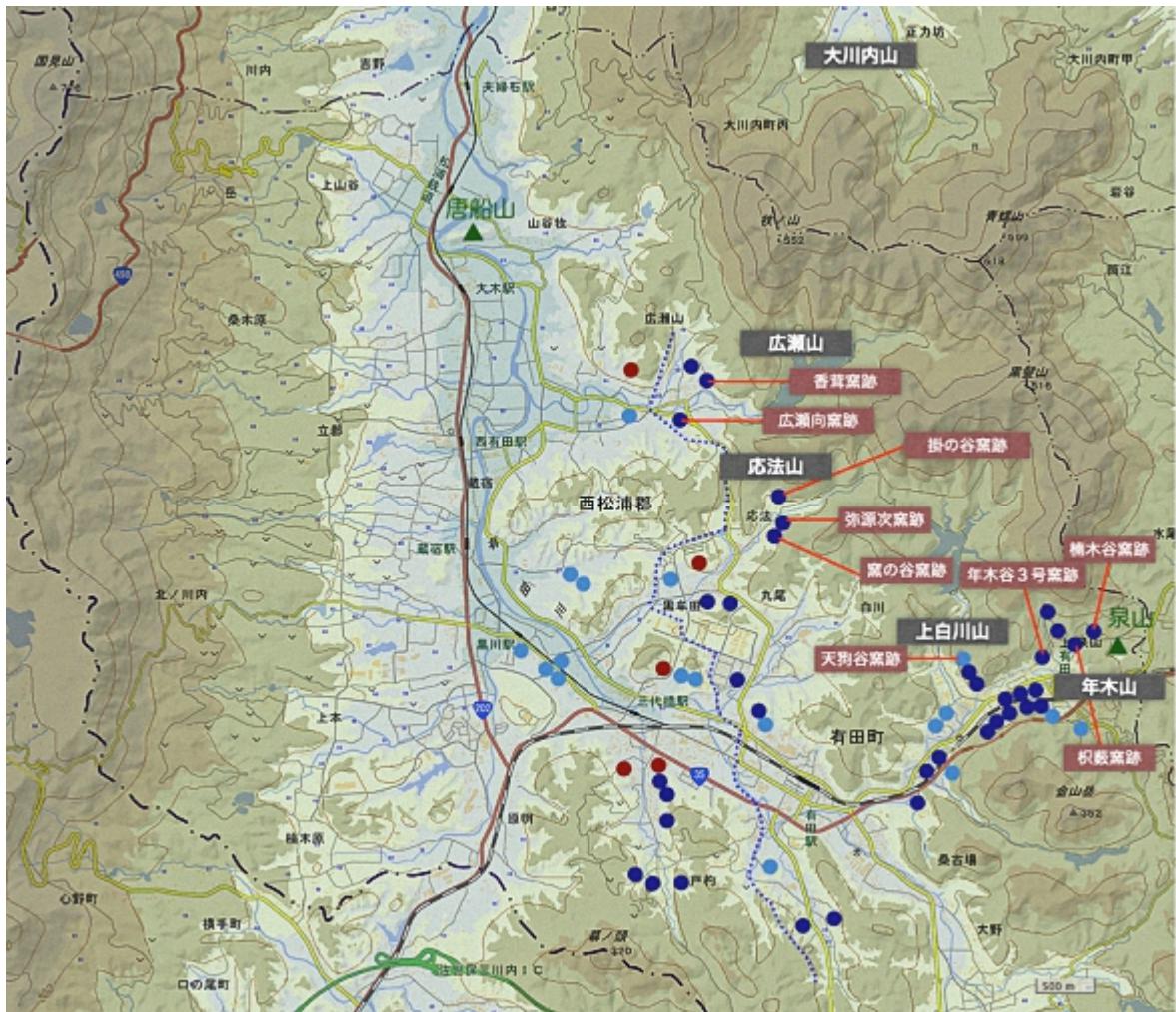
前回は、お代官の山本さんが、後の内山をヨーロッパを中心とした海外輸出の拠点とすべく、技術の平準化を目指して、バリバリの古九谷様式の生産者だけを残して、初期伊万里様式や古九谷様式とのマゼマゼ様式の生産者は、後の外山に配置換えを画策したってところで終わってました。続きです。あっ、そう言えば、これがいつ頃の施策かって話はしましたっけ？？だいたい1650年代中頃からはじめて、1660年前後頃に完了しているみたいですね。少なくとも、1650年代後半には、内山ではスパッと初期伊万里様式の製品が出土しなくなります。

じゃあ、その純粋初期伊万里組の人たちはどうなったかですが、1つは新たに窯業地の新設によつて対処しました。それが応法山や大川内山です。たとえば応法山には、突然、窯の谷窯跡や弥源次窯跡、掛の谷窯跡などができます。同じく大川内山では、日峯社下窯跡や御経石窯跡、清源下窯跡などが築かれます。

さっき記したように、この施策は1650年代中頃から強行されるので、承応2年（1653）の『萬御小物成方算用帳』には、この応法山や大川内山の記述はありません。こう記すと、困ったことに応法山はともかく、大川内山は藩窯なので、あえて表に出さなかつたんじやつて深読みする方がいそうです。でも、それ自体マル秘中のマル秘の『萬御小物成方算用帳』なんて、ぜつたい表になんて出ませんよ。それどころか、こんなすごいもんが残つてゐる方が驚きなくらい。だつて、算用帳つてのはいわば決算簿みたいなもんですから、これつてすべての小物成、つまり雑税の決算簿つてことですよね。自分ちの貯金通帳の中身を人に見せますか？まあ、見せたがりの人もいるかもしれませんけどね…？じゃあ、こつちはどうですか？佐賀藩がこの小物成を何に使つてたかってことです。たとえば、藩主の身の回りのこととか…、まあ、これはいいですが、それとか軍事費。まさか、「うちの藩は、軍事費こんくらゐ持つてまつせ！」って手の内明かすご親切な方はおらんでしょ？たちまち攻められまつせ。だから、絶対表に出すもんじやないので、あえて大川内山を隠す理由がないんですよ。ということで、1つは山の新設です。

でも、これだけじゃちと賄いきれません。そのため、既存の山の中に新しい窯を新設したりしました。広瀬山の香草窯跡なんかがそうです。たぶんの既存の窯の中にも入つていつたと思いますけどね。だから、香草窯跡なんかは、東端の年木山の窯場の製品と似てるのが多いですけど、同じ広瀬山の広瀬向窯跡なんかは、天狗谷窯跡なんかの製品とよく似てるものが多いですね。

とりあえず、こうやって、基準以下の製品が内山から排除されたってことです。ということで、本日はここまで。（村）



- 本文に登場する山や窯場の位置

有田の陶磁史 (322)

前回は、後の内山をヨーロッパなどの海外輸出の拠点とすべく、内山基準未満の生産業者を外山に配置換えたって話をしました。

さあ、これで内山の高効率生産の体制が整いました……、って言いたいところですが、マダマダ。何か抜けてると思いませんか？未満業者は外山に行かせましたが、このブログですっと主役になってきたアレが抜けてるでしょ。超内山の方ですよ。内山の一般的な窯場は、あくまでも古九谷様式の技術を二次的に受容しただけですからね。でも、ミスターXさんとこはもともと外山に位置しますが、高原五郎七さんとことか酒井田喜三右衛門さんとことか技術の元を築いた「元祖●●」、「本家●●」みたいな窯場の技術も、また、内山基準には外れるわけですよ。バリバリ量産

しないといけないのに、丁寧に、ゆっくり、手間ヒマかけて高級品を作られてたんじゃ、はっきり言ってジャマ。また、マネするやつが出てきたんじゃ元の木阿弥ってもんですよ。というわけで、こういう業者は、最も遠くに島流し（？）ってもんですよ。

かくして、五郎七さん由来の岩谷川内山の技術は、何とはるばる大川内山までお引っ越しです。前回お話ししましたが、ここはこの時まで、磁器生産の窯場が築かれたことはなかった場所ですから、とりあえずそっくりそのまま有田から引っ越ししないと、窯業が成り立たない場所です。でも、残念ながら大川内山の超内山製品の生産量なんて、微々たるものなんですよ。登り窯一つまるまる運営するなんてとてもとても…。ですから、前回お話しした内山未満と抱き合せです。つか、内山未満の窯の間借り程度ってくらいかな。

ちなみに、たとえば平戸藩窯とか、何とか藩窯とかって言われてる窯場なんかがありますが、それって皆、この抱き合せスタイルです。なぜ、こういうスタイルが成り立つかと言うと、磁器の場合、有田以外では、藩窯製品なんて言われているもの以外は、通常、下級品しか生産していないからです。何のこと…？？でしょうか。

つまり、上と下の抱き合せで、まん中がスッポリ抜けてるんです。そうすることで、あまりにレベルが違い過ぎて技術が混じらないというカラクリ。ついでに大川内山の場合は超内山は皿中心なのに、内山未満の方は網目文とかの碗が中心なんで、器種まで被らないようにしてあるわけです。

だから、よく大川内山って高級品を焼く窯場だって錯覚されてる方がいますが、ありや、あくまでも山としては下級品の山ですからね。

ということで、本日はここまで。（村）

前回は、内山を海外輸出の拠点とすべく、内山未満の業者を外山へと移し、一方、逆にあまりに高級すぎて内山基準に合わない超内山業者も外山に出さねばってことで、岩谷川内山の最高級品技術が大川内山に移されたってとこまででした。

だから、大川内山は最高級品と最下級品を抱き合わせた窯場というわけです。というよりも、ほぼ最下級品のオンパレードの中に、チビッとだけ最高級品が混ざってるって感じかな。

窯場としては、日峯社下窯跡や御経石窯跡、清源下窯跡なんかがあって、ほぼ同時開業でしょうね。この中では、一般的に日峯社下窯跡が藩窯だったようなイメージが持たれてますが、3窯とも超内山レベルの製品は出土しています。

ここでは、内山の海外輸出の拠点化の話をしてる最中ですので、鍋島の話に脱線しだすと收拾が付かなくなるので詳しくは別途お話しすることにして、ちょこっとだけさわり程度に触れておきます。実は、日峯社下窯跡イコール藩窯のイメージが強いのには、ちょっとカラクリがあります。

日峯社下窯跡は、近年史跡整備計画の一環として年次計画で何度も発掘調査されています。それによって、焼成室は15室あり、超内山レベルの製品はちょうどまん中に当たる、下から6~9室付近の物原で出土することが判明しています。

この窯が最初に発掘調査されたのは、もう一昔前の平成元年（1989）のことです。その時、窯体のほかに物原の部分も少し掘っていて、今にしてみればそれがちょうど8室目の横あたりでした。つまり、最初から当たったんです。超内山レベルの製品も10数点くらい出土してて、「すわ、一大事！！」ってことで、俄然注目されることになったわけです。もし、別のとこ掘ってたら、掘っても、掘っても網目文碗だらけだったでしょうね。もちろん掘った部分も、ほとんどは網目文碗ではあるんですよ。

そこで、御経石窯跡や清源下窯跡も、昔むかしちよびと調査してるんですが、御経石窯跡の場合は物原自体を発掘してませんし、清源下窯跡の場合も物原はわずかだけです。ですから、逆に超

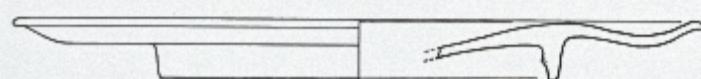
内山レベルが出土したってことの方が奇跡みたいなもんですが、一方、日峯社下窯跡の場合は、鍋島、鍋島、鍋島、鍋島ってことで次々に発掘するもんだから、一つはますますほかの窯と出土数に差が付いたってことです。

もう一つ違いがあります。鍋島様式は、岩谷川内山にはありません。つまり、大川内山でのオリジナルな開発品です。しかし、岩谷川内山にはないので、最初から鍋島様式の製品が作られたわけではありません。まあ、岩谷川内山の製品自体が、有田の中でも独特なクドさを持つ製品ですで、3窯ともそれを地で行くような超内山製品が出土してますが、御経石窯跡や清源下窯跡の場合は多くは青磁などに限られます。つまり、高台外側面に塗り潰し文様などを巡らす染付や色絵素地とか、いわゆる鍋島様式っぽいものは日峯社下窯跡でしか出土していないってことです。

この意味がお分かりですか？つまり、通常鍋島様式としてイメージされるような染付や色絵のものは、おそらく日峯社下窯跡で開発されたってことです。ただ、少なくとも後には鍋島様式は御用品の専用様式に採用されますけど、最初からそうだったという確証はどこにもありません。青磁の鍋島だっていっぱいありますので、御経石窯跡や清源下窯跡の製品だって広義の鍋島様式みたいなもんです。でも、やっぱすばり鍋島様式の染付や色絵素地があると、イメージ的に日峯社下窯跡イコール藩窯ってなるでしょうね。でも、くどいようですが、こんな早い時期に、鍋島様式だけが御用品だったって証拠はどこにもないわけですよ。少なくとも岩谷川内山時代には、鍋島様式なんて存在しないですから、確実に違うわけですね。大川内山に技術が移転した途端、鍋島様式だけが御用品専用様式になるなんてことがあるでしょうか。ほかのスタイルの製品の併用とか、ワンクッションあってもおかしくないと思いますけどね。一般的に、「鍋島様式」「御用品」専用様式って先入観がアリアリですからね。

う～ん、もっとクソ難しい話をしたいところなんですが、内山の海外輸出の拠点化から離れてしまいますので、ここではこれで止めときます。とりあえず、一般的に考えられているほどには、日峯社下窯跡だけが特別ってことではないってことです。おしまい。（村）

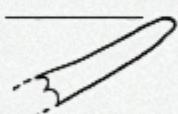
資料53 [物原周辺 表採]



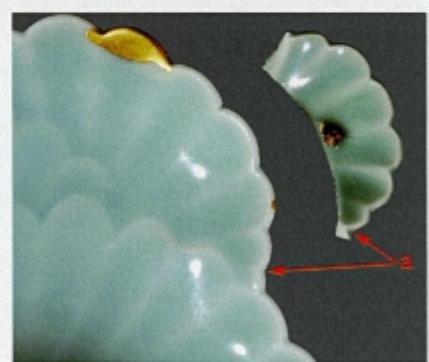
実測図

御経石窯跡

資料54 [物原周辺 表採]



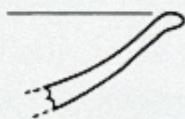
断面図



左：伝世品 右：資料54

御経石窯跡

資料55 [D トレンチ Ⅱ層出土]



断面図

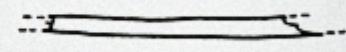
清源下窯跡



鍋島藩窯第Ⅲ地点出土品

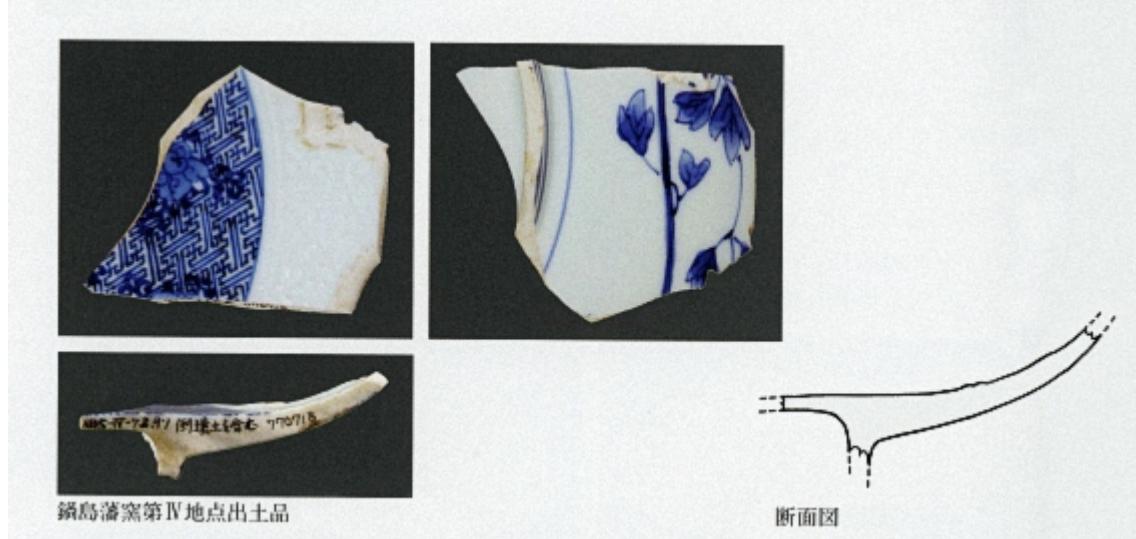
鍋島藩窯跡

資料56 [D トレンチ 撥乱層出土]

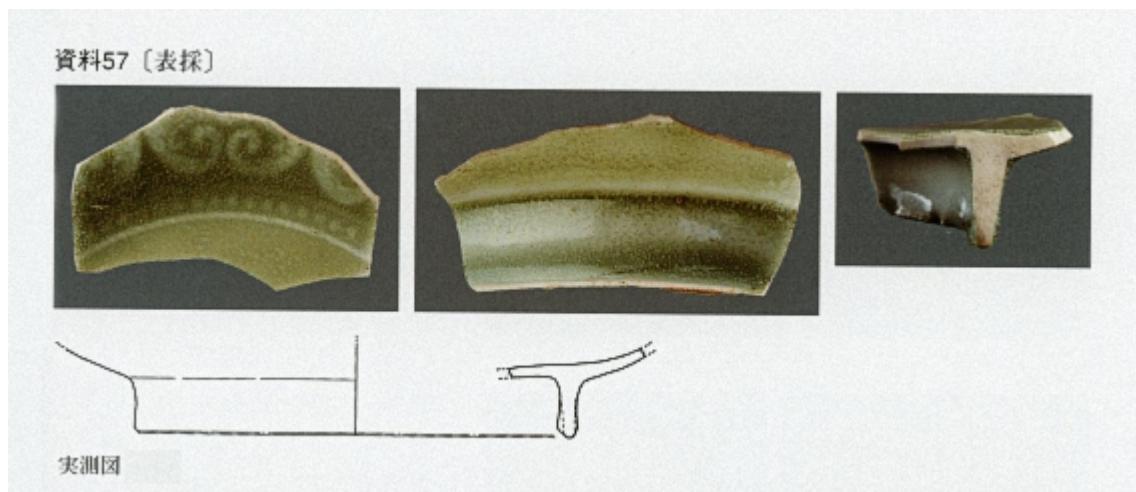


断面図

清源下窯跡



鍋島藩窯跡



清源下窯跡

船井向洋「大川内山所在の窯跡発掘調査報告 - 日峯社下窯跡・御経石窯跡・清源下窯跡出土の初期鍋島について -」

『改訂版 初期鍋島』創樹社美術出版 2010 より転載』

有田の陶磁史 (324)

前回は、大川内山の日峯社下窯跡や清源下窯跡、御経石窯跡の話をしてました。本当は3窯とともに同等レベルの超内山製品も焼いてる窯なのに、どうしても染付や色絵素地の鍋島様式の製品が出土する日峯社下窯跡が特別に思えてくるでしょ。御経石窯跡や清源下窯跡だって、白磁や青磁とはいえ、高台の高い製品も出土してますし、鍋島藩窯跡の類品もあるわけですから、大川内山らしい共通性はあるわけですよ。

でも、少なくとも後には日峯社下窯跡的なスタイルの製品が御用品の専用様式になるもんで、どうしてもそっちが当初からいかにも御用品専用様式だったようなイメージを持たれやすいわけです。しかし、あくまでも日峯社下窯跡のような製品が御用品で、ほかの2窯のものはそうじゃなかつたなんて客観的な証拠はどこにもないんですよ。それに、日峯社下窯跡は発掘もいっぱいやってますので、超内山レベルの出土製品数も多いので、引っ張られやすいってこともあるでしょうね。

本当は、一気に鍋島の話をしたいところですが、これはこれでメチャ脳ミソ使わないと理解が難しい問題ですし、何度も言いますが、今は内山の海外輸出の拠点化の話をしてる最中ですので、とりあえず置いときます。続きです。

それで、岩谷川内山の技術とは別に、もういっちょ超内山の技術があります。そうです。さんざん記してきましたが、喜三右衛門さんとこの「赤絵」の技術です。楠木谷窯跡発ですから、有田の最東端ではあるんですが、内山は内山です。こっちは、がっつり内山に食い込んでいる技術なんで、親和性が高い分、ほっとくと岩谷川内山の技術以上にやっかいです。

かくして、この技術は有田の最東端から最西端の南川原山へとお引っ越しです。まあ、酒井田家一統は、寛永14年の窯場の整理・統合以前には、もともと南川原山…、正確に言えば当時は南川原皿屋ですけど、そこにいたわけですから、元の聖地に戻っただけってことではあるんですが…。

前に記しましたが、この超内山レベルの技術が移転する前の南川原山というのは、超ド下手物生産の場所でした。寛永 14 年（1637）の窯場の整理・統合以前には、バリバリの中心地の 1 つだったんですが、窯業地としては一度オワッテしまい、その後、窯業界から追放された下手下くそ陶工がもう一度やらせてねって過程で復活した窯場なので、よーするに二流いや五流産地みたいなもんだったわけです。この過程で復活するのが、下南川原山では南川原窯ノ辻窯跡で、上南川良山だと樋口窯跡ですね。たぶん上南川原山の源左衛門窯跡も昔むかしのわずかな採集品からはそうだと思うんですけど、全部茶畠になっていて壊滅状態で今は何も落ちてないのではっきりとはしません。まつ、でも後の文献史料にも一切出てきませんので間違いないでしょう。

何度か触れてますが、承応 2 年（1653）の『萬御小物成方算用帳』が、具体的な窯場が分かる最古の文献ですが、この中には「有田皿屋」に含まれる「南河原山」と含まれない「南川原皿屋」という窯場が記されます。たぶん「南河原山」が後の下南川原山で、「南川原皿屋」の方が上南川良山でしょうね。復活したのは、これよりもう少し前の 1640 年代のことだと思いますが、南川原窯ノ辻窯跡の方は染付磁器とともに、う~ん、これでも一応磁器かな~って感じのものもっていうか、技法が磁器でなきや灰釉陶器ではって思えるような青磁なんか多く焼いてますが、樋口窯跡の方は染付磁器も少しあるけど、大半は陶器とう~ん、これでも一応磁器かな~っていう鉄釉製品とかで占められています。

そこにいきなり、バリバリの超内山レベルの技術が入ってくるわけですよ。

まだまだ続きますが、長くなるので、本日はここまで。（村）



超内山レベルの技術導入前の樋口窯跡（左）と南川原窯ノ辻窯跡（右）

有田の陶磁史 (325)

前回は、喜三右衛門さんの超内山レベルの赤絵の技術が、クソ下手物の産地だった南川原山に移転することになったって話をしてるとことでした。

しかし、「有田皿屋」とか、「有田皿山」とか、「南河原山」とか「南川原皿屋」とか出てきて、ちょっとメンドクサイですね。この関係は、前にお話ししたとは思いますが、覚えてますか？いや、急ぐブログでもないですから、分からなければ何度でもご説明いたしますよ。じゃあ、いつもの脱線ですが、今回は先にこれ片付けときますか。

基本的に、最初は各窯場が「皿屋」、つまり、それぞれが独立した窯業地でした。つまり、「皿屋」とは産地の単位です。これが、後に「皿山」と呼ばれるようになったわけです。じゃあ、いつ「皿屋」から「皿山」に変わったのかってことですが…、そんなことどこにも書いてあるものはありません。そもそも寛永 14 年（1637）の窯場の整理・統合の際に、それまでそれぞれが「皿屋」だった窯場を「有田皿屋」として 1 つの組織に統合して、従来「皿屋」だったそれぞれの窯場は「山」という名称に変えて「有田皿屋」にぶら下げるわけですよ。ですから、それ以後は、有田の

窯場はほぼ全体が「有田皿屋」に含まれました。前回お話しした、「南川原皿屋」と「広瀬皿屋」を除いてですが。

だから、このブログでは超有名な山本神右衛門さんが、正保4年（1647）に窯業を管轄する初代代官になるわけですが、この時は「皿山代官」ではなくて「皿屋代官」です。

では、いつから変わったかと言えば、はつきりしたことは分かりません。ただ、前回触れた承応2年（1653）の『萬御小物成方算用帳』では、「有田皿屋」になってます。ところが…、同じ年に例の金ヶ江三兵衛（通称：李参平）さんが、多久家に提出した文書があるんですが、そのタイトルを見ると、「皿山金ヶ江三兵衛高麗ゐ（より）罷越候書立」となっています。そう「皿山」なんですよ。もともと「皿山」という名称はなかったわけですから、少なくともこの年までには「皿山」という使われ方ができたって可能性はあるわけです。でも、一方で『萬御小物成方算用帳』は「皿屋」ですよね。そうすると、必然的に承応2年頃に変わったってことになるわけですが、まあ、三兵衛さんの文書は原本じゃなくて、『多久家文書』にある書き写したものですから、写し間違えてなければって話ではあるんですが…。別に写し間違えたって証拠があるわけじゃないんですけど、そうかもねってって疑念もないわけじゃなく…。というのは、この文書の最後に三兵衛さんの署名が入ってるんですけど、そこに記されるのは「有田皿屋三兵衛尉」なんですよ。そう、「皿屋」なんです。ですから、やっぱお役人が単純に写し間違えたか、あるいは考えられるのは…、こっちの方が有力かな？これを写した頃にはすでに「皿山」に変わってたかですかね。別に文書のタイトルは三兵衛さんが付けてるわけじゃないですから。そうすると、お役人が怠け者でずっと仕事を溜めてたってことなら知りませんが、三兵衛さんの文書の提出からそんなに後のことじゃないような気もしますね。

でも、残念ながら、そのちょっと後くらいに「皿屋」「皿山」なんて名称が記される文書がちょっとと思い浮かばないんですよ。ちょうど40年くらいも後のことになってしまいますが、少なくとも、元禄6年（1693）の大川内山の御道具山がらみの文書である「有田皿山代官江相渡手頭写」では、すでに「皿山」ですね。

ですから、少なくとも承応2年から元禄6年の40年間のどこかであることは確実なんですが、多久家のお役人さんが急け者でなかったとすれば、1650年代中頃の可能性が高くて、ちょうど今お話ししてゐる生産制度改革の一環として変わったと考えれば、なかなか座りはいいですね。

何で名前なんぞわざわざ変える必要があったかと思うかとお察しいたしますが、そんなことは分かりません。ただ、想像をたくましくすれば、もともと窯場の整理・統合以前には、「山」という名称はなくて、全部「皿屋」だったわけです。それを引き継いで、「有田皿屋」を作つて、従来の「皿屋」は「山」に変えたわけです。ですから、本来はこの時点で、やきものの「山」の集合体という意味では、「皿山」の方が適切な名前だったとも言えます。でも、最初は従来の「皿屋」の名称を引き継いで「有田皿屋」にしたんでしょうね。んで、ズルズルとそのまま引きずつてきたけど、やっぱ「皿山」の方が正しい名称じゃないってことで、やつと20年後くらいに変えたのかもしれませんね。まあ、名前をそのままズルズル使いつづけるなんてことは、ほかでもよくある話ではありますから。

ということで、本日は、まったく南川原山の話にはたどり着けませんでしたので、また、次回ということで。（村）

有田の陶磁史 (326)

前回は、「皿屋」とか「皿山」とかの話をしてましたので、肝心の南川原山にはまったくたどり着けませんでした。今日は、南川原山の話です。

内山を海外輸出の拠点にすべく、内山未満レベルの業者は外山へと移動させました。内山を当時の主にヨーロッパレベルの製品の産地とするために、高級量産品生産の場所としたかったわけです。そうすると、内山未満もジャマですが、逆に、超内山レベルもジャマなわけです。そのため、高原五郎七さん発の岩谷川内山の技術は、大川内山に移転させました。

しかし、超内山レベルの技術は、もういっちょありました。喜三右衛門さんちの赤絵の技術です。こっちは五郎七さんちの技術よりも、もっとやっかいでした。だって、すでに1650年代前半

までに、五郎七さん系の技術を覆い隠すように、内山じゅうにこの技術が広まっていたからです。いや、技術的には、五郎七さんや山辺田窯跡のミスターXさん系の技術よりも、はるかにヨーロッパ向けの製品には向いてたんですよ。薄くて白くキリッとしたのが作りやすいので。でも、高効率生産を目指すためには、やっぱジャマです。原料を厳選して、手間ヒマかけて、丁寧に、ジックリ作られたんじゃたまんないですからね。そのため、喜三右衛門さん一統は、窯業地の東端の年木山（泉山）から、西端の南川原山へと大移動したってわけです。

お話ししたように、それまでの南川原山はクソ下手物の産地だったわけですけど、これで一気に逆にクソ高級品の産地に一変するわけです。その際、大川内山は、超内山レベルと内山未満の中でも下の下レベルの生産を抱き合わせにしました。でないと、さすがに超内山レベルは独自に登り窯ひと窯運営できるほどの規模はなかったわけです。しかも、実際はひと窯じゃなくて日峯社下窯跡、清源下窯跡、御経石窯跡の3窯に分割ですからね。

しかし、南川原山方式は、大川内山方式とは大きくスタイルが違いました。内山未満レベルと抱き合わせじゃなくて、山ごと全部超高級品の生産場所に変えてしまったんです。ただ、正確に言えば、段々そうなったって方が正しいかも…。この時できた新しい窯としては、下南川原山の柿右衛門窯跡と平床窯跡があります。既存の窯場としては、下南川原山の方が南川原窯ノ辻窯跡で、上南川原山の方は樋口窯跡です。この上・下南川原山の窯場の中で、最初からバリバリ最高級品を生産したのが柿右衛門窯跡です。酒井田柿右衛門家なんかも、まずはこの窯を使いましたってか、年木山からの移住中心メンバーによって築かれた窯でしょうね。

ってことで、書いてたら、まだまだ続きそうな気がしてきたので今日はこの辺までにしきます。（村）



1650 年代後半頃の南川原山の窯場

有田の陶磁史 (327)

前回は、やっと年木山の技術が移転して最高級品の生産場所になった、南川原山について触ればじめたところでした。続きです。

技術移転前に、南川原山には下南川原山に南川原窯ノ辻窯跡があり、上南川原山には樋口窯跡がありました。そして、技術移転に際して、新たに柿右衛門窯跡と平床窯跡ができました。こうした南川原山の窯場の中で、最初からバリバリの最高級品生産を行ったのが柿右衛門窯跡です。酒井田家もそうですが、楠木谷窯跡の主力級の陶工が集まって開設したのがこの窯でしょうね。

ほかの窯はと言えば、南川原窯ノ辻窯跡のそばに新しくできた平床窯跡は、一部高級品もあるけど、まあ、内山の下の中級品レベルってとこでしょうね。南川原窯ノ辻窯跡も、クソ下手物から完

全に脱してないとはいえ、まあ、これも中級品レベルかな。それで、上南川良山の樋口窯跡も南川原窯ノ辻窯跡と同じような感じ。つまり、最初から全部最高級品ばかりってわけでもなかつたんです。でも、1660年代はじめ頃までには、平床窯跡は廃窯になつてしまつますけど、南川原窯ノ辻窯跡や樋口窯跡は、けつこう上手になつたやんつて感じかな。だんだんよくなります。だから、新生南川原山ができあがる時に、そつくり陶工を入れ替えたつてわけじゃなさそうですね。

こうして、内山の海外輸出の拠点化施策が実行に移された結果、最高級品生産の南川原山と大川内山の一部、高級量産品生産の内山、中級品生産の外尾山や黒牟田山、下級品生産の応法山や広瀬山、大川内山って、山ごとの生産品のレベル別区分ができたんです。それで、こうしてやつと「内山」「外山」という概念や地名ができあがつたわけです。つーか、これでやつと毎回“後の”つて書かなくていいので単純にうれしい…。

まあ、ひと言で言えば、藩の産業的磁器生産の中心地という意味での「内山」とそれを補完する「外山」ってことです。一番大きな違いは、内山は全体が1つの大きな工場みたいなもんですが、外山は山ごとに性格が異なります。以後、この製品ランク別生産が19世紀に至るまで約150年くらい続くわけです。

あつ、お断りしておきますが、あくまでも高級品生産がよくて、下級品生産はつまらんって話じやないですからね。芸術作品作ってるわけじゃなくて、商品作るわけですから。有田の磁器なんて、当時は最先端の工業製品ですからね。本質的には、いい製品っていうのは、よく売れて、よく儲かる製品であつて、決して製品の完成度とか芸術性とかは関係ありませんから。それよりも、こうして有田皿山の中で、磁器に関しては上から下までがっちりスキマ無く需要を押さえられることで、市場を主導的に操ることができるのが重要なんです。（村）

前回は、内山を海外輸出の拠点とすべく、内山基準に合わない製品の業者を上下ともに外山に移したって話をしました。これによって、山による製品ランク別の生産体制が確立し、“内山”、“外山”という概念も確立したって話をしました。いや～、内山・外山に“後の”を付けなくて済むのは、本当に心地よいですね。続きです。

こうして、スパッとものすごく内山の技術の平準化が図られたもんですからスッキリとしていいんですが、でも、現在研究とかする上では、ちょっと困ったこともあります。それは、逆にあまりに窯によるレベル差がなく均質なもんで、よほどその窯にしかない特殊なもんでもない限り、消費遺跡とか窯ではないところで出土したもんなんかは、どこの窯の製品だかゼンゼン見分けが付かないんですよ。ホントみごとなくらい。だから、皆さんもムリして内山のどこの窯の製品かなつなんて悩まない方がいいですよ。ムダですから。脳ミソ疲れるだけソン。それくらい均質ですから。まあ、かつては“肥前”って括りだったわけですから、“内山”という括りにまで絞り込めるようになつただけでも大進歩ってとこですからね。

ということで、代官の山本さんの策略した、内山の効率的量産化施策はおしまい！ チャン・チャン！！…で片付いたって言いたいところなんですが、これで終わらないのが山本さんなんですよ。最後、これまでかってギュギュッともうひと絞りするわけです。

内山の上絵付け工程、つまり色絵磁器生産の工程も分業化しちゃったんです。この上絵付け専業業者を「赤絵屋」と言います。現在でも、有田の内山のほぼ真ん中に「赤絵町」って地区がありますが、この赤絵屋創設の際に業者を集住させた地区あたりを、お隣の幸平地区から分割して赤絵町という地区を新設したってことです。当初の赤絵屋は11軒で、その内9軒が赤絵町の範囲内にあったと言われています。その赤絵町にあった赤絵屋の1軒が有田郵便局の建て替えの際に発見された赤絵町遺跡で、赤絵町外の赤絵屋の1軒が上有田交番の建て替えの際に発見された幸平遺跡というわけです。

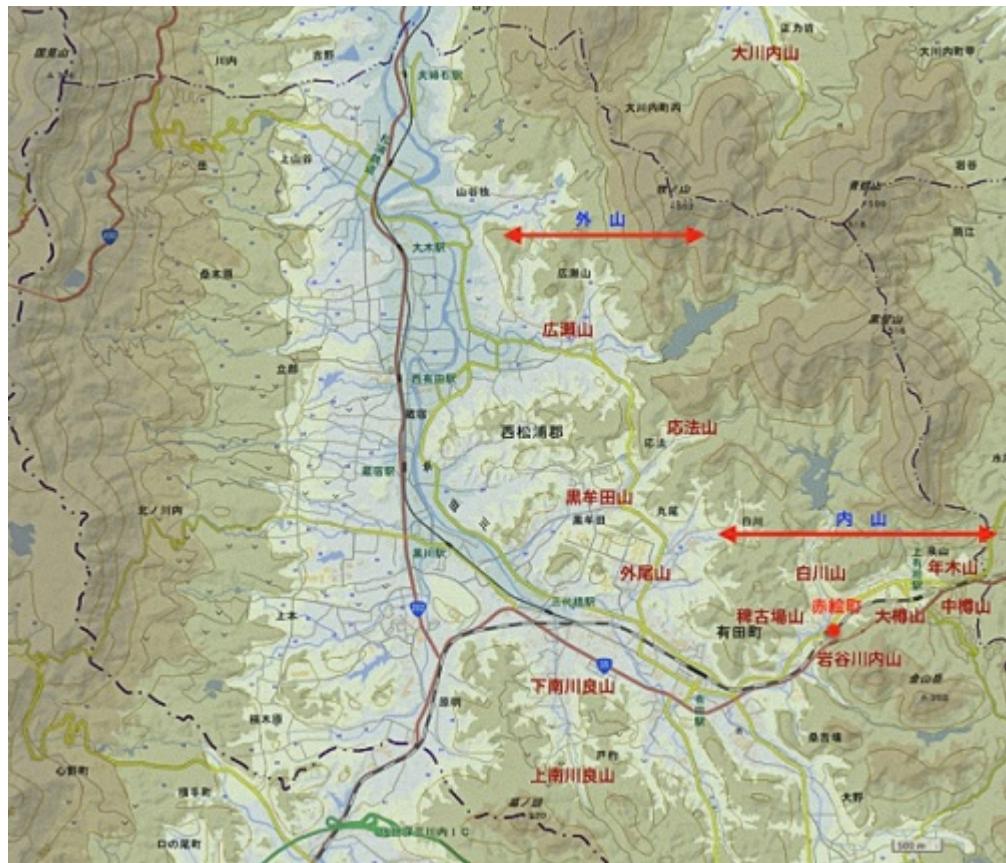
余談になりますが、もうかれこれ 35 年くらいも前になりますかね。赤絵町遺跡の発掘調査をしたのが。町の人からは、上絵付けは失敗なんてしないので、何も出るはずないって散々言われたのを思い出します。

本当に、有田の内山の調査って大変なんです。絶対に遺跡水没の覚悟はしとかないといけませんからね。水脈が浅いので、場所にもよりますが、1m ちょっとくらい掘ると水がじわりと湧いてきたりするんです。なので、雨でも降ると、即水没します。そして、その後お日様がギラギラしてくると最悪。天然サウナ状態です。

まあ、それはいいですが、赤絵町遺跡は町の人の期待に反して、残念ながら、色絵その他ザクザク出土したんですけどね。収蔵用コンテナ 1,000 箱以上出ましたからね。約 1,000 平方メートルでその数ですから、だいたい 1 平方メートル 1 箱ってくらいです。まあ、これが有田の町なかの遺跡での標準ってとこかな。コンテナ買うのに一度に 100 箱以下なんて、買ったことないですから。最高は一度に 5,000 箱以上買ったこともありますね。かつては、有田町ではコンテナも備品で、備品シール貼れって言われてたんですが、一発でそんな習慣吹っ飛びましたよ。5,000 箱もシールなんて貼れるわけない。そんなに備品シールの在庫なんてないし。

とにかく、どこでもメチャクチャ遺物が出土するってのが有田なんですよ。登り窯掘ったら、さらにこのレベルじゃないんですけどね。行政小さい。したがって、調査体制小さい。ついでに、整理作業や保管する箱物小さい。だから、有田の調査ってほんと苦労するんですよ。考古学的調査で一般的な、人海戦術なんて使えませんからね。

完全に話がそれてしましましたが、本日は、この辺までにしときます。 (村)



内山・外山と赤絵町の位置図

有田の陶磁史 (329)

前回は、内山の窯業の再編成の仕上げに、内山の上絵付け工程を分業化し、業者を集めて赤絵町と称される地区を作ったって話をしてるところでした。脱線したので、内容については、ほぼ進みませんでした。続きです。

この赤絵屋の制度がヨーイドンして完成するのはもちろん内山の窯業の再編の一環ですから時期的には同時並行で、だいたい 1650 年代の中頃から 1660 年代初頭頃までの間です。

あっ！勘違いされると困りますので、念押ししちりますが、この上絵付け工程の分業化は、あくまでこの時点では、内山の話ですからね。昔は赤絵町の成立後は外山も含めて分業化されたみたいな話になってましたけどね。なので、やれ南川原山の酒井田家だけは特別だっただの、応法山で色絵陶片が出土すれば、すわ隠れ赤絵屋だのって話がまことしやかに語られていましたが、まあ、何か理由を考えないと収まりが付きませんので、単なるこじつけに過ぎません。

何度もお話ししますが、酒井田家は色絵の開発者じゃないですし、そんなもん、赤絵屋なんて道具や原料、赤絵窯とかいろいろ必要ですから、隠したってすぐバレてしまいますよ。この同業者だらけの有田みたいなところをナメたらあきまへん。マニュファクチャですから、従業員は全員窯焼きの工房に集まってやきものを作ります。人の口に戸は立てられませんからね。違法行為なんぞは、速効で伝わりますよ。

外山の話が出たついでに、忘れるといかんので、赤絵町成立後の外山の色絵磁器生産の話を先にしきましょか。

前に話したように、古九谷様式の製品が生産された 1650 年代中頃までは、外山でも南川原山を除くほとんどの山で色絵磁器が生産されていました。ところが、これがパッタリとなくなるんですよ。正確に言えば、南川原山を除いてですけどね。

外山は、従来通りそのまま本焼き業者である窯焼きが一貫生産しても OK のままなのに何でって思うでしょ。古九谷様式から引き続いて、そのまま作り続ければいいのにね。そうなんですよ。なぜだと思いますか？

思い出してください。古九谷様式の時代までは、窯場によるランク分けはありませんでした。ですから、もちろん窯場によってうまいへたはありますが、一つの窯場で上・中・下の全部を一貫生産していました。でも、内山の再編に伴い、山ごとの製品ランク別生産に変わりました。

そうすると、外山の場合は、南川原山を除いて、内山以下の生産場所に変わりますから、当時はまだ相対的に高級品であった色絵磁器は守備範囲外ってことになります。中級品以下の素地に上絵付けすることになりますからね。さらに、内山から初期伊万里みたいのを作っていた人たちが集められるわけで、そういう人たちは従来から色絵は生産していなかったわけです。

まあ、掲げればまだ理由は思い浮かびますが、とりあえず、こうして南川原山を除く外山から、一旦色絵磁器生産がなくなるわけです。あつ、忘れてました。南川原山のほかにも、大川内山でも色絵は生産されてるんでした。でも、短絡的に藩窯だからって考えるのは止めてね。当時から、大

川内山だけが、唯一の御用品供給地だったって証拠はどこにもないんですから。要するに、一旦、内山以上の山しか色絵磁器は作らなくなつたって話です。

ということで、本日はここまでにしときます。（村）

有田の陶磁史 (330)

前回は内山の窯業の再編との関わりで、外山の窯場の色絵磁器生産の話をしてました。それまではとんどの山で、古九谷様式の色絵が生産されていましたが、この制度改革に伴い南川原山と大川内山を除く外山では色絵磁器の生産がストップしました。

くどいようですが、制度的にできなかつたわけじゃないですよ。内山と違つて、上絵付け工程の分業化には組み込まれてませんので、禁止されてたわけじゃないので。だから、南川原山や大川内山では、生産されているわけです。すぐに酒井田家や藩窯とからめて考えがちですが、何も南川原山や大川内山が特別だったからじゃありません。これらと外山のほかとの違いは、生産される製品のランクが違つことです。南川原山と大川内山のごく一部は、内山よりも上のランクの製品が生産されました。つまり、当時はまだ高価な色絵磁器は、内山以上しか生産されなくなつたということです。そのかわり、内山ではバンバン生産するようになりますけどね。

あつ、話す機会を逸するといけないので、ここで例の山辺田窯跡の古九谷様式の技術がどうなつたかって話をしとくことにしますね。たぶん、してなかつたような…？？まあ、重複しても別に犯罪じゃないのでいいですが…。

ほかの古九谷様式の技術の一次的導入窯である岩谷川内山の猿川窯跡と年木山の楠木谷窯跡の技術は、それぞれ大川内山と南川原山に移転して、その後改良が加えられ、鍋島様式や柿右衛門様式として完成しました。芯の部分は生き残つたってことですね。

また、それぞれ一度有田全体に技術が拡散しましたので、内山などでは喜三右衛門さんちの年木山の技術の影響が色濃いとはいえ、五郎七さん由来の岩谷川内山の技術もチラチラとは残つたわけです。さらに、再編後は中級品を焼いた外尾山や黒牟田山では内山の劣化版みたいな製品の生産に

変わりますので、色絵磁器はなくなりますが、喜三右衛門さんや五郎七さんの技術の名残はあるわけです。

ちなみに、下級品生産の山では、広瀬山などはもともと初期伊万里様式と古九谷様式の製品が混在していて、そこから古九谷様式の技術が引っこ抜かれて、さらに内山の地域から初期伊万里様式を生産していた人たちが送り込まれているので、ほぼ初期伊万里様式が引き継がれたって構造になっています。また、応法山や大川内山は、制度改革で新しく設けられた山ですので、最初から初期伊万里の人たちの集合体です。ですから、まったく同時期の技術の影響を受けないってことはないので、多少は中級ランクの窯場に近い技術なんかも見え隠れはしますが、大勢としては初期伊万里様式が引き継がれたって感じです。

じゃあ、肝心のミスターXさんちの山辺田窯跡の技術はどうなったかってことですが…、話したいのはやまやまですが、どう考えても長くなりそうなので今日はこのへんでやめときます。（村）

有田の陶磁史（331）

前回は、山辺田窯跡の古九谷様式の技術の行方を話すつもりでしたが、その前段の話をしてたら長くなってしまったので、山辺田窯跡の話は今回に持ち越しました。続きです。

大皿生産を中心とした山辺田窯跡の古九谷様式の技術ですが、前回お話ししたとおり、それが普及した周辺の窯場が次々に宗旨替えをしていったわけです。外尾山の外尾山窯跡は、内山の劣化版生産みたいになっていきますし、山辺田窯跡に続いて古九谷様式の色絵大皿を多く生産した丸尾窯跡は、廃窯になってしまいます。また、広瀬向窯跡は古九谷様式の延長線上の技術を破棄して、初期伊万里様式調の製品に主体が移行します。つまり、古染付・祥瑞系や南京赤絵系のようなほかの技術系等と違い山辺田窯跡の技術は、外山以外にはほとんど伝播していませんので、まあ、言ってみれば丸裸状態です。

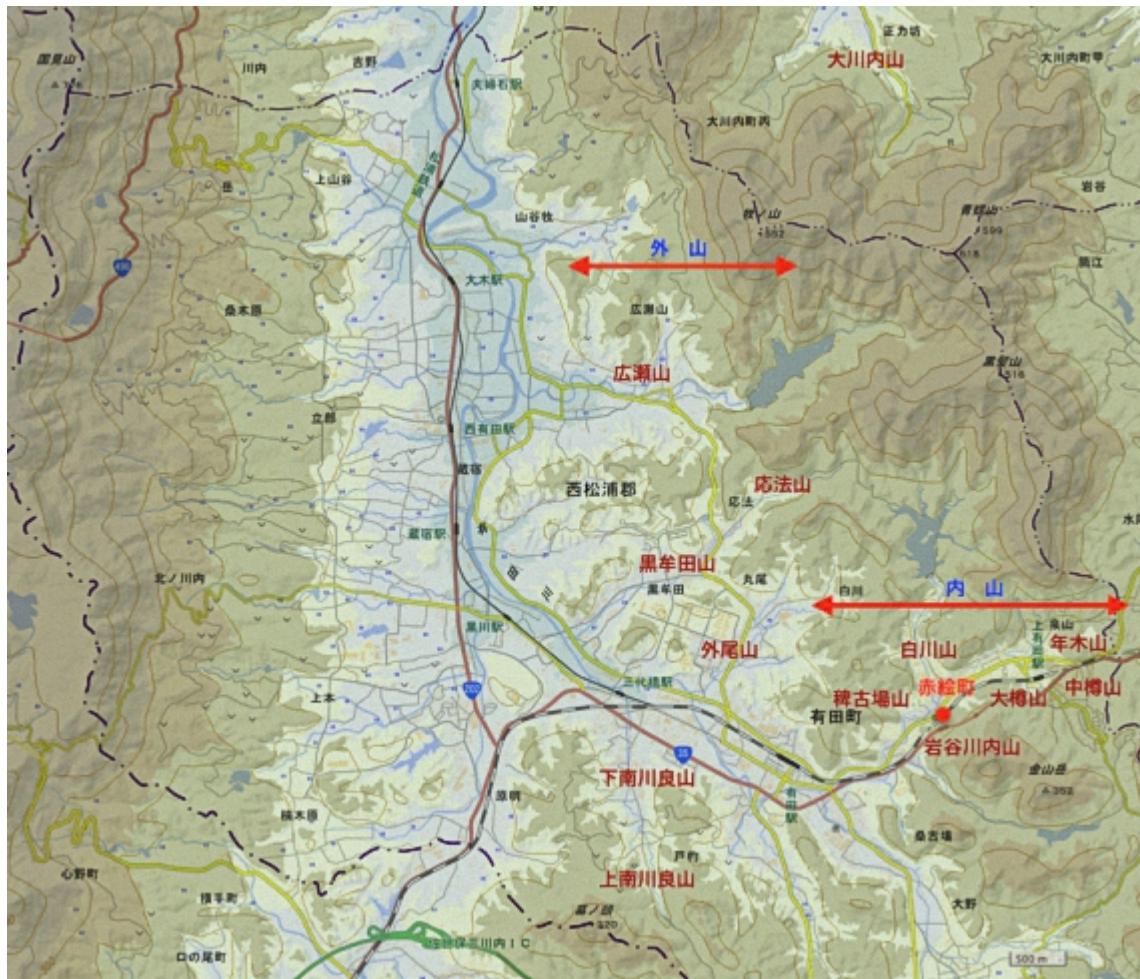
とは言え、それ以前に古九谷様式後期の色絵磁器大皿の主体というかほぼ全てが、素地に白磁を用いてるわけですから、外山の多くが色絵磁器生産から撤退した時点で、技術が意味を成さなくなってしまいます。日本磁器の場合は、型打ちも陰刻もない正真正銘の無文の白磁なんてほとんど需要がないですからね。

じゃあ、この外山の窯場で色絵磁器を生産していた業者はどうなったかってことですが、単純に色絵生産をあきらめた業者も多かったはずですが、一部は内山に移され、赤絵町で上絵付け生産に関わる経営者なり従業員になったはずです。そうすると、必然的に外山では陶工の数が減ったことになります。いや、正確に言えば減ってないと思いますけどね。むしろ、増えてるでしょうね。減った以上に、内山から初期伊万里様式関係の業者が移されてますので…。

なので、下級品生産の場合、応法山や大川内山が新設されてますし、広瀬山の場合は、広瀬向窯跡に加えて、香草窯跡が新設されています。これだけでもなかなかのもんですよ。だって、香草窯跡には登り窯が2基新設されますし、応法山には窯の谷窯跡、弥源次窯跡、掛の谷窯跡の3つの窯場ができますし、大川内山も日峯社下窯跡、清源下窯跡、御経石窯跡が開設されるわけですから。こうした窯場の製品は下級品ですからほぼ伝世しないでなかなかピンときませんが、こうしてみると、17世紀後半にも初期伊万里様式調の製品が相当数作られていたことが分かりますね。

一方、山辺田窯跡の位置する黒牟田山や外尾山など中級品生産の山ですが……。

今日こそは、山辺田窯跡の話をするつもりだったんですが、また今日もたどり着きませんでした。申し訳ありません。次回こそはたどり着きますので、ご容赦ください。（村）



内山と外山の位置

有田の陶磁史 (332)

前回は、山辺田窯跡の古九谷様式の技術の行方をお話しするつもりで、またまたたどり着きませんでした。

とりあえず、外山の窯業の要点だけおさらいしておくと、1650 年代後半になると南川原山や大川内山を除いた外山では、色絵磁器の生産からは撤退し、その一部の人たちはたぶんというか、間違いなく内山の赤絵屋の運営に携わったんだと思います。そのため、内山の赤絵屋跡である赤絵町遺跡や幸平遺跡では、数点ですが、山辺田窯跡や丸尾窯跡など、外山の古九谷様式の大皿の色絵製品や素地が出土しています。まあ、そこで生産したことを匂わすほどの数じゃないので、外山から移住する際に持ってきたもんでしょうね。

そうすると、外山の陶工の数は減りそうなもんですが、逆に、内山から初期伊万里様式の製品を生産していた人々がごっそり移り住みますので、新しい山ができたり既存の山の中に新しい窯場ができるたりと、かえって陶工の数は増えたと思います。

ただ、これは下級品の山の話です。こういう山では、多くは初期伊万里様式風の製品が生産されるようになりますので、それまで広瀬山など既存の山に流れ込んでいた山辺田窯跡の古九谷様式の技術は吹き飛んでしまいました。

あつ、誤解を受けそうなんで、ちょっとお話ししておきますが、下級品生産の山では初期伊万里様式風の製品がたくさん作られたのは事実なんですが、典型的な初期伊万里様式風とは呼べないものもたくさんあります。生産量が多いものとしては、海外輸出向けとかですね。というのは、同じ海外輸出でも、内山は主にヨーロッパ向けを生産しましたが、東南アジア向けについては外山で生産されています。ただし、色絵は別ですよ…。外山は原則的に色絵生産から撤退するので。相対的に高級品である色絵は、当時は東南アジア向けでも内山で生産されてます。

東南アジア向け輸出品の例としては、日字鳳凰文皿なんかがそうです。まあ、これは外面無文が基本で高台径も小さめなので、初期伊万里の範疇ではありますけどね。というか、1650年代中頃に再編前の内山の窯場で作られはじめますが、最初は一般的な初期伊万里様式の製品よりも、多少高台径が広めでした。それが、再編後内山では生産されなくなり、外山の定番になる頃には、高台径をやや広く作るというコンセプトは忘れ去られて、一般的な初期伊万里風の製品と変わらないものが多くなってきます。

龍鳳見込み荒磯文碗・鉢なんかもそうですね。1650年代の後半の中で内山の窯場で作られはじめますが、内山の再編が完了する1660年代のはじめ頃には、すっかりなくなって、外山ばかりになります。本来は、碗と鉢では内面の文様が少し違うのですが、たとえば鉢は口縁部に雷文帯を配して、見込みの鯉文もちゃんと魚の形をしてますが、碗の口縁部は圏線で、鯉文は魚の形ではなくフジテレビのマークみたいな渦々にヒゲが2本チョコンと出たような文様なんですが、このルールも関係なくなります。碗の文様構成の鉢とか。

芙蓉手皿なんかは、ヨーロッパ向けは内山で作り続けられましたが、粗雑な東南アジア向けなんかは再編前には内山にもありました。以後は外山の窯場で作られ続けています。輸出向けの芙蓉手皿なんかは、厳密に言えば初期伊万里ではないですね。でも、まあ、下級品の山の場合、初期伊万里っぽい技術で作るので、何を作っても初期伊万里っぽくはなるんですけどね。

ということで、あらっ、今日も話がそれてしましましたので、とうとう山辺田窯跡にはたどり着かなかつたですね。次回こそは脱線しません。（村）



内山と外山の海外輸出品の比較

有田の陶磁史 (333)

なかなか先に進まなくて申し訳ありません。思い付いた時に書いとかないと忘れそうなので、つい脱線してしまいます。今日こそは、山辺田窯跡がらみの話をします。

それでです…。前回お話ししましたが、窯数が増える下級品の山とは対照的に、実は、中級品の生産地となった外尾山や黒牟田山などでは、また違った動きがあります。窯数が減るのです。外尾山の場合には、外尾山窯跡は残りますが、丸尾窯跡が廃窯になります。また、黒牟田山では多々良の元窯跡は残りますが、山辺田窯跡は潰れます。つまり半減です。

潰れてしまう山辺田窯跡と丸尾窯跡と言えば、古九谷様式時代には、いわば外山の雄。色絵の大皿生産量 No.1 と 2 ですから、内山の赤絵屋には、ここから陶工引き抜かないでどこからって感じですよ。しかも、下級品の山の場合、陶工が引き抜かれても、余りある陶工が内山から押し出されてきたわけですが、さすがにそういう人たちは中級品生産の山には不向きです。かくして、中級品生産の山は、陶工の数が激減したわけですから、登り窯の数も半減ってなるのも道理が通ります。

じゃあ、中級品の生産減ったのってことになりますが、もともとこの当時の状況では、コンセプトが中途半端なんですよ。作られている製品が、上は内山製品の劣化版みたいなもの、下は下級品生産の山と似たようなもの…。ですから、もっと国力がついて国内需要でも伸びれば中級品需要も増えるはずですが、この時点では、まだまだ。どんな磁器かじゃなくて、まだ磁器であること自体に付加価値を感じる層には、下級品の山の製品で十分ですからね。

ということで、その結果、山辺田窯跡の古九谷様式の技術がどうなったか？もうお分かりですね。空中分解、灰燼に帰すってどこでしようか。跡形もなくジ・エンドです。

でも、山辺田窯跡から内山に移った人なら技術を継承してるでしょ？って突っ込まれそうですが…。よく、よく考えてみてください。内山って、海外輸出、主にヨーロッパ向けの拠点とするために、わざわざ上絵付け工程を分業化したわけですよ。趣きを重んじる日本の美感ならいざ知らず、あの重苦しい寒色系の色調の色絵なんて、海外でウケるでしょうか？まっ、それ以前に、その転職した赤絵屋に持ち込まれる色絵素地は、どっぷりと喜三右衛門さんちの技術に浸かったピカピカのやつですからね。上絵の具も段々洗練されて色調が薄くなっています

から、その素地にいくら寒色系の絵付けをしても、見た目は軽い！軽い！！とても、古九谷様式と呼べるもんにはなりませんよ。

ということで、17世紀後半の有田の後継技術の柱として残った喜三右衛門さんちの技術。そして、それを補完するものとして、生き残った五郎七さんちの技術なんかと違って、山辺田窯跡のミスターXさんの技術は、途絶えてしまったってことです。

以前、よく古九谷石川説の根拠の一つとして、古九谷様式と柿右衛門様式はあまりに違い過ぎて、変遷するはずがないってのがありましたが、ですから、山辺田窯跡の技術から柿右衛門様式が誕生したんじゃなくて、酒井田家の喜三右衛門さんの開発した南京赤絵系の技術を洗練して柿右衛門様式に発展したんだってばー。柿右衛門から柿右衛門ですよ。新旧を比べみると分かりますが、上絵の具の色調や線の纖細さ以外は、構図にしろ配色にしろ、まったく違和感ないですよ。だいたい、乳白色の素地自体は、楠木谷窯跡のものも柿右衛門窯跡のものも、肉眼では見分けが付かないくらいですからね。

ということで、今回はやっと山辺田窯跡の頭出しができてホッとしました。（村）

有田の陶磁史（334）

前回は、やっと山辺田窯跡の古九谷様式の技術がどうなったかって話ができて、空中分解したってことでした。ということで、ようやく本題の内山の話をしようかと思ったのですが、一つ話しう忘れていることに気付きました。またかい？って言われそうですが、そう、またなんです。そのまま死んだフリしといても良かったんですが、これまでどこかの活字に書いてあるのを見たことないので、一応簡単に触れておこうかなって思います。

それは、内山の赤絵屋の創設に際して、それまでの内山だけではなく外山からも業者を集めたって話をしました。そうすると、たとえば外山の上絵付けの職人の一部は赤絵町に移ったってことでいいですが、何か忘れてませんか…？？

そうです。色絵磁器の製作は上絵付けするだけじゃありません。その前に素地を製作する人がいて、それに上絵付けをするわけです。その素地を作った人たちは、もちろん色絵素地ばつか作つたわけじゃないので、色絵素地はやめても染付製品とかに注力すればいいだけです。

でも、たとえば山辺田窯跡や丸尾窯跡のように、いっぱい色絵磁器を生産してたとこでは、ごつそりとその分の素地の生産なくなるわけなので、だから、前回お話ししたように、中級品の生産山などでは窯数自体が半減するわけです。そうすると、やりくりはしたでしょうが、必然的に作ってる人がだぶつき気味にはなりますよね。今まで歯車が全部かみ合って回ってたのに、合理化により、歯車余っちゃったってとこですかね。

という前提の元に、ちょっとおもしろいことがあります。というのは、ちょうどこの頃、色絵磁器の生産が有田以外でもはじまります。有田の近くでは、嬉野市の吉田皿屋です。佐賀藩内ではありますが、有田のように本藩領ではなくて、蓮池藩という支藩領です。印判手仙境文大皿なんかがよく知られてますが、伝世品の写真を掲載できないので、どういうものか分からぬ方はググってみてください。（https://www.facebook.com/kyuto.saga/posts/2677226252322899/?locale=ar_AR） 。それから、よく知られてるのは石川県の九谷ですね。ついでに、広島県福山市の姫谷焼なんかもそうです。ちなみに、これ以外に 17 世紀の間に、本州に技術が流出した例はあります。

そういえば、かつては九谷古窯の技術はいずこからってみたいな話がありましたが、そんなもん肥前地域しかありませんよ。だって、九谷古窯のような連房式登り窯はもともと肥前のオリジナルで、中国にも朝鮮にもありませんし、窯詰め方法が李朝風ってのも肥前そのものですからね。窯道具も同じです。

そう言えば、忘れてましたが、前に山辺田窯跡の古九谷様式について話した際に、九谷古窯の技術は、山辺田窯跡の伝統的な技術を受け継ぐ、白磁素地を用いた寒色系の絵の具を用いる上質なタイプではなく、ほとんど伝世しない多くは赤絵の具を使うタイプの技術が移転したのではってことを説明したような？？ただし、山辺田窯跡の技術が移転したんであっても、いつでも移転が可能だったってことはないわけで、そこには歴史的必然性が不可欠なわけです。必然性なんて言うと、鍋島家と前田家の姻戚関係がどうのこうのって話になりそうですが、そりや、九谷のことだけ考え過ぎでは？？じゃ、ほぼ同じ頃に流出している姫谷は…？吉田は…？？ってなるでしょ。共通の理由が必要じゃないですかね。やっぱ経済活動ですよ。それぞれの藩だか商人だか知りませんが、儲けようと思ったんじゃないですかね？？うまくいけば続くし、いかなければ短期間で廃窯って、それだけの話です。

って書いてたら、だいたい予定の文字数になってきましたので、続きはまた次回ということで。

(村)

有田の陶磁史 (335)

前回は、ちょうど有田で内山に端を発する窯業の再編が起こった頃…だと思いますが、ほぼ同時に…だと思いますが、なぜか佐賀県嬉野市の吉田皿屋や石川県の九谷、広島県福山の姫谷などでも色絵磁器の生産がはじまったって話をしている最中でした。果たして偶然なんでしょうかねえ？

とりあえず、九谷古窯の技術は、多くは赤絵の具を使う山辺田の下級色絵の技術が移転したのではってところまで話してました。続きです。

ちなみに、九谷の場合、もともとは九谷のお宮に奉納されたもので、発掘調査報告書によれば、現在は東京の富岡八幡宮に所蔵されているという花瓶に「明暦元年（1655）六月廿六日田村権左衛門」の銘のものがあり、塚谷澤右衛門『芨憩紀聞』（1803）という古文書には「（前略）九谷

の宮に花瓶一対あり、田村權左衛門明暦元年六月十六日と藍にて有。是は焼もの手初に此花瓶を焼、奉納したると伝傳。（後略）」とあります。

つまり、この文書のとおりであれば、九谷の窯場は明暦元年頃に開かれたことになりますね。石川の地元では開窯時期に関する説はいくつかあるようですが、有田の窯業技術に基づいて九谷古窯の開窯時期を推測するとすれば、まあ、この明暦元年なんてのはドンピシャってとこですね。つか、有田の技術が移転しているのは間違いないので、これより前でも後でも都合がよろしくありません。窯構造や窯道具、出土した製品などのすべての技術に矛盾しない時期を考慮するなら、どう見ても、1650 年代前半頃に有田で使われた技術が移転したとしか考えられませんから。

そうすると、やっぱこれまでお話ししてきた有田での窯業の再編の時期と、ジャストフィットじゃないですか。この時期なら、体制からあぶれた陶工いますからね。生産体制もだんだん強化されていきますが、皿屋代官の制度が設けられたのがようやく正保 4 年（1647）の 12 月のことですから、まだまだユルい時期です。ですから、これならちゃんと歴史背景の中に落とし込めるというこ

とです。

ただ、九谷古窯はたぶん山辺田窯跡の技術ではって言いましたが、九谷古窯の出土品に使われてる技法というかクセというか特徴というか、そういうものを考えると、山辺田窯跡でないとしても同じ黒牟田山の多々良の元窯跡とか、百歩か千歩譲っても広瀬向窯跡止まりで、その程度しか候補がありませんね。だって、以前説明したと思いますが、白磁大皿焼いてる窯場 자체がかなり限られますので。

もちろん、丸尾窯跡なんかは、大皿いっぱい焼いてますが候補にはなりません。高台とか、製品の作りがもっと内山チックでゼンゼン違いますので。だから、九谷は少なくとも黒牟田山の技術の可能性が最も高いと思います。

続いて、吉田や姫谷については…ってお話ししたいところですが、まだダラダラと長くなるといけないので、本日はこの辺までにしときます。（村）

前回は、九谷古窯のはじまりは、明暦元年（1655）くらいでいいんじゃないですかねって話や、たぶん山辺田窯跡や多々良の元窯跡などのある黒牟田山の技術が移転したと考えて、間違いないと思いますってことなどを話してました。そうすると、1650年代中頃から60年代初頭くらいの間に行われた、有田の窯業の再編時期とピッタリ！！この時期なら、色絵素地作る人がだぶついてますからねってことでした。

九谷古窯の場合、黒牟田山の技術ではあっても、外尾山の丸尾窯跡なんかの技術じゃありまへんって言いました。丸尾窯跡って、黒牟田山の技術と比べて、もっと内山っぽいんですよ。

でも、むしろ嬉野の吉田なんかは、かなり丸尾窯跡の可能性はあるかもですね？もちろん、地元の陶石を使ってるので、質的には野暮ったいですが、技術的にはまるで黒牟田山の匂いがしませんので。

視点を変えれば、吉田の場合は、技術的に丸尾窯跡でなければ内山の窯場としか考えにくいです。でも、内山に大皿いっぱい焼くような窯はありませんけどね。もちろん、1点も焼かなかつたなんてことは言いませんよ。でも、技術の移転先で大皿いっぱい焼いてるんでしたら、もとから焼いてたって考えるのが自然でしょうから。

一方、姫谷はその逆です。技術的には内山っぽい要素が多いんですが、そうでなければ丸尾窯跡って感じ。その両方に近い要素があって、なかなか決定打がありませんね。色絵とかの伝世品見ると、内山っぽいんですが、特に変形皿とか染付入り素地とかは外山の窯場にはほとんどないです。

伝世品じゃなくて、窯跡の出土資料見ると、もっと迷いますね。伝世品と違って、その窯の普通のものの割合が高いので。たとえば、窯詰めの際の窯道具の中で、磁器質の逆台形ハマが出土しますが、1650年代前半までの外山の窯場には少ないですから。

でも、スパッと割り切れないのは、一つは大ぶりな高台内蛇ノ目釉剥ぎの青磁皿とか。普通は、内面に陰刻文様入れるやつです。あんなもん、生産しているのは、丸尾窯跡や外尾山窯跡、山辺田

窯跡、多々良の元窯跡、広瀬向窯跡とかが圧倒的な割合ですから。それに、サヤ鉢はごくわずかな粘土紐成形のものを除いて、古い技術である轆轤成形のもので占められています。内山では、1650年代前半までに楠木谷窯跡の技術の影響が大きくなるので、サヤ鉢はほとんど粘土紐成形のものに変わってしまいます。でも、外山の窯場では同じ時期に、まだまだ轆轤成形のものを使ってます。つーか、その頃になると、外山の窯場でサヤ鉢使う窯が丸尾窯跡とか外尾山窯跡とか限られてきますけどね。

たとえば、山辺田窯跡なんかの場合は1640年代頃にはサヤ鉢使うんですが、1650年代頃になると、染付製品の劣化が著しくて、サヤ鉢使うもんなんてなくなってしまいます。多々良の元窯跡も同様です。古九谷様式の製品の場合も、素地がキレイなもんの割合は急低下するんですが、だいたい外山の窯場の場合は大皿とかが多いので、もともとサヤ鉢になんて入りませんよ。

たしか、記憶が確かならば、山辺田窯跡の全出土サヤ鉢の中で、粘土紐成形のものは、1、2点だったと思います。3、4点ならゴメンナサイで、5点は絶対ありませんって程度です。

ということで、姫谷は少なくとも黒牟田山とかじゃないですね。もっと、喜三右衛門さんちの技術の影響が強いです。丸尾窯跡と楠木谷窯跡や内山の陶工がいっしょに行つたってことが成り立つなら、それが一番シックリきますけどね。両方とも、1650年代中頃に窯場自体が消滅しますし

ね。まあ、証拠はないので単なる妄想です。

ということで、本日はここまでにしとります。（村）

有田の陶磁史（337）

前回は、嬉野の吉田皿屋と福山の姫谷について、技術は有田のどこの窯場から行ったんだろうって話をしました。何で有田の技術って決めつけるんよってご意見もあるかと思いますが、さすがに1650年代前半までに色絵磁器の技術が存在するところって、日本広しと言えども他にはありませんのからねえ…。ちなみに、波佐見でその時期の可能性のある採集品が1点ありますが、波佐見て確定もできないもんですし。

とりあえず、吉田は丸尾窯跡の可能性が高くて、もしかしたら内山もあるかな～？ってことで、姫谷は楠木谷窯跡をはじめとする内山の要素も丸尾窯跡の要素もあってなかなか決定打ないですねってことで、あくまでも妄想レベルでは、その両方の陶工が行ったらああなるでしょうねってところ。九谷と違って、山辺田窯跡など黒牟田山の技術じゃないけどってことで終わってました。

あっ！言い忘れてましたが、姫谷のような内山的な要素も丸尾窯跡的な要素も感じられるような技術や製品構成を、あえてムリヤリ一つの窯場でクリアしようと思えば、一つだけ選択肢がありました。丸尾窯跡と同じ外尾山の外尾山窯跡です。この窯場は、外山でも最も南の一番内山寄りにあります。何度か記したことがあります、この窯場って丸尾窯跡よりもさらに内山っぽい製品を焼いているんですよ。大きいのもあるし、小さいのも、変形皿なんてのもいっぱい。岩屋川内山の劣化版って記したこともあるかな。でも、やっぱ外山なんで白磁や青磁の大皿とか焼いてるし、この時期の外山では珍しくサヤ鉢もありますしね。もちろん、口クロ成形のやつ。なんて、考えるどちよっとピッタリのような気もしてきましたね。ただ、丸尾窯跡と違って窯場は廃止にならずに存続したんですけどね。でも、ここは並行して複数の窯体が稼働してましたので、窯数は減ったのかもしませんけど。

と、ここまでよしとして、問題はこれからです。まだ問題あるのってとこですが、あるんですよ、これが…。だって成形しただけじゃ製品になんないですからね。日本磁器の場合は、白磁って少ないですから、下絵にしても上絵にしても、だいたい文様は入れますから。

ところがです。実は、九谷にしても姫谷にしても、吉田は微妙ですが、染付製品も含めて、絵付けがゼンゼン有田っぽくないんですよ。同じ題材を描いていても、何だかちょっとね～。有田にはない構図や絵柄の製品も多いですし。概して、下絵である染付よりも、上絵の方がより稚拙っぽくてダメですね。いや、味があつていいじゃんって思うのは勝手ですけどね。

たとえば、九谷というと、散々っぱら絵師の絵だとか脅すもんだから、さぞや立派なもんばっかりみたいなイメージがありますが、実際に九谷古窯や工房跡である九谷 A 遺跡の出土品見ると、う～んってもんが多いようで…。まだ姫谷の方がずいぶん上手なやつは上手ですが、有田の製品の

絵付けと比べて、上手いへタじやなくて、上手さも下手さもちょっと感覚的に違うんですよ。吉田の場合は、たしかに肥前の匂いはしますけどね。でも、ちょっと描き方は雑かな。

だから…です。作る人は行ったけど、もしかしたら、絵付けの職人行ってないんじゃないの？あるいは行ってても、絵の具の作り方とか絵付けを指導する程度のごくわずかな人数なのかなって思ってしまいますね。成形の方はそれなりに修行した人でないと形にならないけど、絵付けは素人でも、絵が自体が描けないってわけじゃないですからね。ワタシなんかのようなド素人でも器に絵は描けますが、やっぱ有田風な絵を描いたつもりでも、何だか独創的なゲージュツ作品に仕上がってしますからね。

ということで、本日はこのへんにしどきます。（村）

有田の陶磁史 (338)

前回は、嬉野の吉田はともかく、九谷や姫谷って絵付けの職人は行ってもちょっとだけなんじゃないでしょかって話をしてました。有田と似てるようで似てないんですよ。

姫谷については、絵付け技法の源流について語られることはほぼないですが、伝世する変形皿なんかが分かりやすいですが、明らかに成形も絵付けも有田磁器を手本にしてますね。でも、何となく絵の感じは違うんですよ。

そういうえば、たしか石川の方ではずっと前から、九谷古窯の絵付けは、有田じやなくて京焼の影響だって言われてるんでしたね。まあ、そう見ようと思えば見えなくもないものもありますが、どうなんですかね？？もうちょっと似せたらどう？って感じの有田磁器の絵にも見えるんですけどね。九谷古窯の製品にまで、ゲージュツセイを求めるといけないんですかね？有田と同じように、単なる工業製品だと思うんですけど…。だったら、わざわざ陶器の絵付けに似せなくても、先進地の磁器の絵を手本とするのが筋だと思うんですが。だって、時代が下が

って技術が伝播したような地域でも、磁器はみんな有田の製品に一生懸命似せようとしてますよ？？製品のランクによっては、有田を摸した波佐見を摸すみたいなことはありますけどね。

それはともかく、まあ、考えてみれば、主に黒牟田山や外尾山の人たちが移ったって想定してみれば、当時そうした外山で生産されていた色絵素地にはほぼ染付はないわけです。そうすると、外山の窯場が色絵磁器生産から撤退したり廃窯した場合でも、色絵以外が同じ生産量だったとすれば、色絵素地生産がなくなる分、作る方の人はだぶつくけど、絵付けの方の方はそうではないってことになりますよね。だから、絵付けの方はあまり行ってなくても、数的には合うかもです。

もっとも、そんな記録があるわけじゃないので正確なことは分かりませんけど、あれだけボディーには有田風の技術が使われてるので、有田の人が行って描いたにしては、絵柄の方はすんなり入ってきませんねって話です。まあ、でもたまにザ・アリタって絵付けの製品もないわけじゃないので、そういうのは有田から行った大先生が描いたのかもしれませんけどね。単なる妄想ですけど…。

その他、磁器生産を興すには、そもそも分業ですから、いろんな工程の人が必要です。たとえば、窯築き（かまつき）さんや窯焚きさんも一時的には行ったかもしれません、まあ、現代の作家さんなんかでも、自分で登り窯築いて、自分で焼いてたりしますから、多くの工程は専門の人たちが行かなくてもできないわけじゃないです。

いずれにせよ、それまで窯業の基盤のなかったところで登り窯運営しようと思えば、かなりの人数が行かないとムリでしょうね。やきもの作りというと、何だか山奥で細々と陶工が作ってるみたいなイメージを持たれがちですが、磁器は最初から組織的というかチームプレーですからね。たとえば、九谷古窯の1号窯でも焼成室が12室以上ありますから。12室分窯詰めするだけの製品を作るのは、少人数ではちょっとキツイですよ。だって、現代の個人作家さんが登り窯造る場合は、ほとんどが焼成室は2、3室程度ですし、1室の規模もずっと小さいですか

らね。

ということで、この話は一応これで終わりにしちゃいます。（村）

有田の陶磁史（339）

前回まで、内山の窯業の再編の過程で外山も含む人々の大移動に繋がり、ついでに外山で色絵素地作ってた人なんかはすこしだぶつき気味になつたんで、どういう経緯だかは分かんないけど、一部の人たちは九谷や姫谷、吉田なんかに活路を求めたんじやないでしょかって話をしてました。前にも述べましたが、九谷や姫谷みたいな本州というか、九州以外に技術が移転したのは、17世紀ではこの時だけです。どう考へても17世紀に限れば、後にも先にも、1650年代中頃から後半くらいしか、技術が流出するチャンスというか、可能性はありません。

でも、18世紀後半になると砥部焼など四国などにも技術が流出しはじめ、19世紀になるともう止まりませんねって状態になりますけどね。目的は、民間の経済活動か、各地の藩による産業振興のための特産品作りってとこですね。少なくとも、ゲージュツ作品を目指したところなんてないですからあしからず。まあ、こうした側面もあるのは、江戸期から作家という概念のあった京都くらいですかね。でも、18世紀以降の流出って17世紀と決定的に違うのは、有田ではなく、お隣の大村藩や平戸藩あたりの技術というか人が出て行っていることです。

おっと、こんな話をしはじめると、また脱線してしまいそうなので、話を元に戻したいですが、いったい技術移転の話の前は何の話題だったんだかってとこですね。前の記事を読み返してると、どうやら山辺田窯跡の古九谷様式の技術は空中分解して、有田の後継技術としては何も形をとどめていまへんってところで、脱線しはじめたんでした。

でも、山辺田窯跡の技術が完全消滅したっていうと、あんな芸術性の高いもんがまさかねって思われる方もいらっしゃるかとお察しします。でも、それって現代の視点や工芸品としての価値観で見てませんか？古九谷は狩野派かなんかの絵師の絵だそうですが、少なくとも有田で作られた古九谷様式の製品はご指摘のとおり職人の絵ですから、芸術とはまるで関係ありまへんがな。あくまで

もお金を稼ぐための商品です。売れるものはいくらでも作るし、売れないものは今日からでも止めますよ。

喜三右衛門さんちが開発した、洗練された技術の製品を量産する体制ができそうなのに、いつまでも古い技術の製品なんて作りませんよ。売れないもん。最新のスマホが発売されたのに、わざわざ 10 年前のスマホと同じ値段で買う人いますか？スマホと古九谷、何の関係があるんじゃって言われそうですが、有田磁器は、当時の最先端の工業製品ですから大同小異です。

ということで、話を進めるつもりでしたが、ゼンゼン進まなかつたですね。次回はマジメにやります。 (村)

有田の陶磁史 (340)

前に内山の上絵付け工程の分業化の話をしてて、先に外山の窯場がどうなったかって話題に触れたところで話が脱線して本日を迎えました。本日こそは本題の内山の話をします。

前にお話ししましたが、内山の窯場の製品は極度に技術の平準化が図られ、よほどのことがない限り、どこの窯場の製品なのかは見分けが付きません。色絵素地の場合は、本焼き業者である窯焼きが、登り窯で焼成した後、赤絵屋へと運ばれるわけですが、その素地が窯場による質差が大きかったら、まともに絵付けなんてできませんからね。同じものを大量に作るわけですから、素地もなるべく同質のものでないと、同じ製品になりませんので。

思い出したのでお話ししておきますが、17世紀後半の色絵素地はその大半が白磁です。伝世品をイメージされた方だと、染付の入るもんも結構あるじゃんって思われるかもしれません、そりや伝世品だからですよ。並レベルの製品が一般的な出土品なんかだと、割合的には圧倒的に白磁で、染付入り色絵素地を探す方がなかなか難しいくらいです。

外山の南川原山や大川内山のように、引き続き本焼き業者が上絵付け工程を兼業できるなら、さほど問題はありません。ですから、伝世する割合の高い高級品だと染付と色絵の併用のものも珍し

くありません。たとえば、大川内山の製品が一番分かりやすいですね。あそこの技術は、祥瑞の影響を色濃く残しますから、原則的に色絵と染付の併用ですから。

御用品だから特殊…、何て言われそうですが、現在初期鍋島なんて呼ばれているもんだけが、最初から御用品専用様式だったって誰が決めたんですかねえ？そういう文書でもあるんでしょうか？？わたしは知りませんが、それが分かる出土資料でもあるんでしょうか？？おっと…、また脱線するといけないので、鍋島の話はまた後日ジックリってことで今回はやめときますね。とりあえず、実際には御用品として使われたとしても、今のところその証拠なんてないですよ。

話を戻しますが、外山と違って、内山はそう簡単にはいかんのですよ。だって、本焼き業者と上絵付け業者が別ってことになったので。いちいちわけ分かんない下絵の入った素地を赤絵屋に持つてこられても困るでしょ。そんなことすればするほど、せっかく生産制度や製品を単純化して、効率的量産をしようとしてるのに逆効果ですよ。白磁なら、いろんな絵付けの製品に利用できるわけですから。

ってことで、もうちょっとこのことについて話したいんですが、長くなりそうなので次回ということで。（村）

有田の陶磁史（341）

前回は、17世紀後半の色絵素地は白磁が大半って件を思い出したので、それについて話してたら、それすら終わりませんでした。続きです。

前回お話ししたとおり、外山の南川原山や大川内山では、染付入りの色絵もそれなりには生産されています。特に、大川内山はその割合がバカ高です。これは、古染付・祥瑞系の影響が大きい技術を引きずっているからです。だって、祥瑞手って地文や丸文が特徴的ですが、もともと丸文とかの輪つかだけ染付で入れて、内部の文様は色絵ってのがお決まりのパターンでしょ。

ところが、内山では本焼きと上絵付け工程が分業化されたので、そう簡単にはいきません。染付入れると、別々の業者間で、一つの設計図共有してなきゃいけないってことですからね。内山って

すごい種類の製品作ってるのに、いちいちそんなことしてたら、本来の効率的量産目的には逆行しますよ。白磁なら、素地は同じでも、いろんな文様描いて、はい！別の種類できあがり！！って具合でいいですから。

しかも、内山は喜三右衛門さんちの洗練された技術がおおむねベースになってますので、白磁と染付では素地から製法が違います。このタイプの白磁素地は、後に南川原山ではいわゆる乳白手として発展するものですから、最初から染付なしを前提としています。乳白手素地は、釉薬が薄く、鉄分も少ないので、呉須が黒くなつてうまく発色しません。

しかも、本家の景德鎮磁器と違って、有田の場合は、古九谷様式の時代から、すでに上絵の青を使えてますから、わざわざ下絵で入れる必要もないですね。ちなみに、景德鎮では康熙五彩からで、1700年頃にはじまるって言われてますので、今後研究が進んで遡ることがあっても、古九谷よりも前にくることはないと思いますけどね。

その代わりって言っては何ですが、内山で量産したとまでは言いませんが、多少作っている染付と上絵を併用した色絵があります。それは染付製品としてすでに構図が完結しているものに、赤や金などで文様の輪郭をなぞっているようなタイプです。これだと、染付製品としても出荷するし、色絵製品としても出すので、分業の弊害はないですからね。しかも、こういうタイプは、実は、楠木谷窯跡なんかによくあるパターンで、つまり、あらかじめ喜三右衛門さんちの技術に組み込まれてるもんなんです。

とは言っても、もちろん内山に染付入り素地を使った普通のもんが、まったくないってわけじゃないんですよ。でも、やっぱ窯焼きと赤絵屋で、綿密な設計図の共有は必要ないやつですが。それは、壺とか鉢とかが多いかな？口縁部や腰部などに染付圏線だけ入れるやつです。逆に、何でわざわざ下絵でやる必要があるの？って感じですが、青で圏線入れたかったのかかもしれませんね。

上絵の場合、圏線に使うのは赤が普通で、青を使ってるもんなんて見かけませんから。わたしは作る人じゃないのでよく知りませんが、赤や金みたいなガラス化しない絵の具はともかく、ガラス化して発色する青や緑、紫ほかの色は、線には適さないかもしれませんね。

ということで、内山で染付入りの色絵素地が一般的になるのは、もっと分業制度が熟してきて、そう…、1690 年代に金襷手古伊万里様式がはじまる頃まで待たないといけません。

ということで、本日はおしまい。（村）

有田の陶磁史 (342)

前回は、17世紀後半の内山では、色絵素地は染付を併用するものも多少はあるけど、大半は白磁を使ってますって話をしました。赤絵屋の話を続けます。

この赤絵屋ですが、これまで述べてきたとおり、本業は上絵付けです…。といいたいところですが、少なくとも17世紀後半の赤絵屋は、もっと手広くやっています。やってますってより、藩から許されてますってのが正確でしょう。きっと、まだ上絵付けだけで生活するのは難しかったのかかもしれませんね。

以前もお話ししたことがあります、これまでに赤絵屋跡は2軒発掘調査しています。赤絵町に位置する赤絵町遺跡と、隣の幸平地区に位置する幸平遺跡です。この中で、幸平遺跡では粉碎した陶石を水簸するための水簸槽の遺構が検出されています。また、赤絵町遺跡では、釉石を粉碎するための踏み臼の臼跡が発見されています。こうした施設は、本焼き業者である窯焼きの遺跡である中樽一丁目遺跡では、複数発見されています。考えていただければ分かりますが、こういう土を作ったり、釉薬を作ったりの施設というのは、本来上絵付けの工程とは無関係なはずです。

ところで、赤絵屋跡を発掘調査すると、共通してわんさか出土するものがあります。製品成形用の土型です。最初、赤絵町遺跡を調査した時には、何で？？って思いましたよね。だって、当時は当然赤絵屋は上絵付け専門業者だと考えられていたし、自分でも疑うことなくそう思っていましたから。まあ、でも調査をはじめた最初の頃から出土したわけじゃありません。最初の頃というと、つまり、時期的には19世紀くらいってことです。どんどん掘り進めましたが、18世紀でもほぼ出土しません。ところが、17世紀の土層や遺構に至って、わんさか出はじめたのです。最終的に、保管用のコンテナナビッシリ数10箱はありますので、結構な量です。

しかも、出土した土型には共通点がありました。ほぼすべて、押し型成形用の土型ってことです。ちなみに、土型には2種類あります。一つが型打ち成形用、もう一つが押し型成形用です。違いは、型打ち成形用が、まず口クロで製品を成形しておいて、それを土型に押し当てて、たたき板で外面から叩いて整形するための型です。一方、押し型成形は、口クロを使わずに、直接粘土を土型に押し込んで成形するための型です。最も代表的な例としては人形類なんかで、やはり土型もメチャいっぱい出土しています。あと、瓶類なども結構ありますね。変形の猪口とか…。

しかも、中にはその土型で作った製品なんかも出土してますし、上絵付けしたものまで揃うものもあります。これって、もはやここで作ったとしか考えられないでしょ。でも、赤絵町遺跡だけだと、たまたまそこの赤絵屋がそうだったみたいな可能性もあるわけですが、幸平遺跡掘っても同じ状況でした。稀には染付入りの素地なんかもありますので、呉須も使ってたってことでしょう。

まあ、登り窯跡ばかりの調査で、赤絵屋のことなんて何も実態が分からなかった時代でしたので、大発見ですよ。

ということで、まだ続きそうなので、本日はここまでにしときます。（村）



土型と同型の製品の出土例（赤絵町遺跡）

瓢箪の上に座る布袋像の土型・色絵素地・色絵製品

前回は、1650年代中頃から成立した“赤絵屋”は、実は上絵付け専門業者じゃなくて、製土から上絵付け工程まで一貫して行っていた業者でしたって話をしてました。でも、じゃ従来の本焼き業者と変わらないじゃんってことになりますが、決定的に違うのは、人形類とか口クロを使わない製品に特化しており、碗・皿とか口クロを使用するものは作っていないってことです。ですから、大量に出土する土型も押し型成形のものばかりで、型打ち成形用のものは出土しないって特徴があります。

しつこいようですが、これってあくまでも内山の話ですよ。外山は従来と同じように、引き続き本焼き業者が上絵付けまで一貫して行っています。ただし、この内山の生産制度改革の一環として、山ごとの製品ランク別生産が確立しますので、内山以上の高級品を生産した南川良山と大川内山を除く、中・下級ランクの製品生産山では、色絵磁器生産から一旦撤退してしまいました。というとまた勘違いされそうですが、大川内山の場合は、あくまでも山としては下級品生産の場所ですからね。そこに、ごく一部だけ最高級品の生産が組み合わせられているだけですので、くれぐれもお間違いなく。

ところで、内山の赤絵屋では製土から上絵付けまで一貫して行っていたことはいいとして、じゃあ、逆に疑問が湧きませんか？本焼き業者である窯焼きの場合は、製品を製作して登り窯で本焼きした色絵素地を赤絵屋に持ち込むという流れになるわけです。じゃあ、逆に赤絵屋の場合は、土型で成形するところまではいいとして、素焼きや本焼きはどうしたんでしょうね？土型だって焼かないといけませんしね。窯焼きと逆に、赤絵屋から窯焼きへ持ち込んで、素焼き窯や登り窯で焼いてもらったという流れがあったんでしょうか？でも、こんな複雑なことするなんて、いくら何でも不思議だと思いませんか？あくまでも、上絵付け工程の分業化は効率生産の一環ですからね。

窯焼きの場合、工房のある屋敷地内に設けた素焼き窯で素焼きし、山の斜面に築いた登り窯で本焼きします。でも、赤絵屋の場合は、工房内にある窯は赤絵窯だけです。さあ、どうしましょう？以前、山辺田遺跡の説明をした時にお話ししているとは思いますが、上絵付け工程分業化以前の工

房ですと、工房内に赤絵窯があつて、本焼きは登り窯で行います。素焼き窯は、楠木谷窯跡に関わる工房などにはあつたはずですが、山辺田窯跡などではまだしてませんのでありません。この場合は、本焼きは登り窯、上絵付けは赤絵窯と、同じ業者であつても自前で使い分けられるわけです。ヒントは赤絵窯なんですが、お分かりですか？まつ、でもまだ話は続きますので、答えは次回ということ。（村）

有田の陶磁史（344）

前回は、上絵付け工程が分業化された内山の赤絵屋では、口クロを使わない製品については製土から上絵付けまで一貫して行っているって話をしてました。でも、それなら素焼き窯も本焼き用の登り窯も持たない赤絵屋では、どうやって色絵素地を焼成したんでしょうねってところで終わってました。本焼き業者である窯焼きと逆に、焼成は色絵素地の焼成までは窯焼きに委託したんでしょうかねってことですが…？

最初にお断りしておきますが、残念ながらこれについて記したような文献史料は一切ありません。なので、発掘調査の成果から、ちょいと頭をひねるしかありません。

まず、人形類などを成形後に焼成するには、素焼きと本焼きが必要になります。それから、もう一つ人形類などの成形に使う土型も素焼きですから、それも焼成する必要があります。窯焼きの場合は、工房内に素焼き窯があつて、本焼きは山の斜面の登り窯で行います。でも、赤絵屋の工房内には素焼き窯はなくて、赤絵窯しかありません。じゃあ、どうしたんでしょうか？

あつ、それについて記す前に、またちょっと脱線していいですか？素焼きのはじまりについて、ちょっと思い出したことがあるんで…。

そもそも、最初の磁器である初期伊万里様式が作られていた時期には、まだ素焼きは行われておらず生掛けでした。素焼きは古九谷様式の時期に至ってはじまりますが、古九谷様式なら何でもかんでも素焼きしてあるってもんでもなくて、ここでさんざんっぱら説明してきましたが、“古染付・祥瑞系”、“万暦赤絵系”、“南京赤絵系”に区分した古九谷様式の中でも、“南京赤絵系”の中で開発さ

れます。例の喜三右衛門さんちの技術です。薄くて白くて…、後に乳白手って呼ばれる素地として完成するやつです。前にもお話ししたように、喜三右衛門さんは上絵の赤絵の具の開発に苦労したんじゃなくて、一つはこの素地の開発に四苦八苦したってことですよ。従来の製品とはまったく一線を画す質の製品ですからね。

そこで、この素焼きですが、こういう事情があるので、喜三右衛門さんも使っていなかったはずの楠木谷窯跡では、素焼きの破片がボチボチ出土します。登り窯のところで運んで割れたとか、まあ、何かがあってそのまま廃棄されたんでしょうね。なので、そういう素焼き片には呉須で描いた文様が残っています。

それで、先ほどお話ししましたが、素焼きは知られる例では、工房内に設けられた素焼き窯で行なわれます。外形的にも内部構造的にも、ちょうど登り窯の一部屋を抜き出したような窯です。

そうすると、たとえば素焼きは喜三右衛門さんがはじめたとすると、新しい種類の製品だけじゃなくて、素焼き窯も開発しないといけなかったってことですよね。でも、いきなり登り窯の一部屋を抜き出したような素焼き窯なんて思い付きますかね…？

そこで、ちょっとおもしろい発掘調査成果があります。楠木谷窯跡には登り窯が2基あって、西側に1号窯、東に2号窯が並んでいます。1号窯が1640年代後半から50年代前半の窯で、2号窯が50年代前半から中頃の窯です。2つの窯はだいたい10数メートルくらい離れてます。ところが、1号窯のさらに西には枳藪（げずやぶ）窯跡という窯が位置しており、実は、1号窯と2号窯の距離よりも、1号窯と枳藪窯跡の方がはるかに近い距離にあります。焼いてる製品も違いはありません。操業年代もほぼ同じです。つまり、今は別の窯跡として数えられていますが、枳藪窯跡ももともとは楠木谷窯跡と同じ一つの窯場でしょうねってことです。

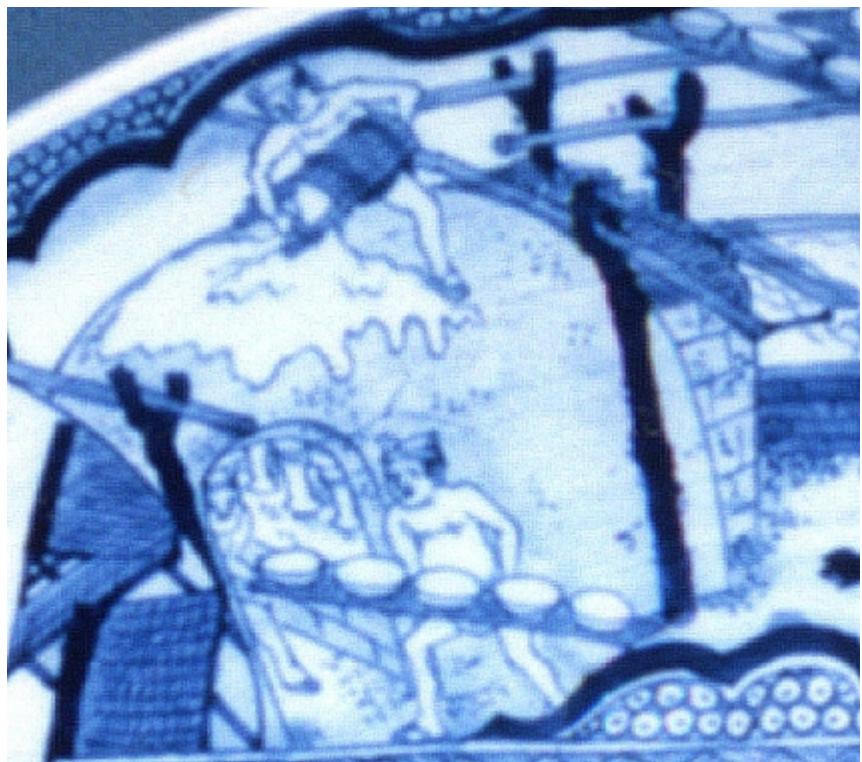
それです。この枳藪窯跡の発掘調査では、おもしろい出土状況が確認できました。何と、一番上の焼成室床面には製品がたくさん残っていたんですが、それが素焼きばかりだったんです。先ほどお話ししたように、楠木谷窯跡では、素焼き片がボチボチ出土します。だったらそのたぐい？それとも焼成不良の焼け損ない？？って思うでしょ。でも、残っていた素焼き片には絵も描かれてな

いし、釉薬の痕跡もないんですよ。つまり、吳須で絵付けする前の工程のものが、そこで焼かれたってことです。それって、まさに素焼きでしょ。

つまり、登り窯の一部屋を抜き出したような素焼き窯が開発される前は、本当に登り窯の一部屋で素焼きしてた可能性が高いわけです。

登り窯で素焼きする例は、ないわけではありません。時代はグッと下がりますが、明治時代以降は登り窯の一番上の部屋で素焼きが焼かれています。窯を下の部屋から段々焚いていくと、最終的にその余熱だけで、素焼きがこんがり焼き上がるって仕組みです。枳敷窯跡の例も一番上の部屋ですから、同じですね。

ということで、本日は脱線話になってしましましたが、ここまでにしときます。（村）



『有田皿山職人尽し絵図大皿』（有田陶磁美術館蔵）「素焼き窯」の部分

前回は、内山の赤絵屋で生産した人形類とかはどうやって焼いたんでしょうねって話をしようとし
て、素焼きの話に脱線したところでした。素焼きは、酒井田喜三右衛門さんちの“南京赤絵系”的古
九谷様式の技術ではじまり、もしかしたら当初は素焼きは登り窯の一番上の焼成室で焼かれていた
のかもってところで終わってました。ついでですので、もう少しこの話をさせてくださいね。

そもそも喜三右衛門さんの“赤絵”的技術は、商人である東島徳左衛門さんが長崎で「志いくわん
(四官)」なる中国人から伝授されたものを、喜三右衛門さんに「これ作ってくんね～？」って持
ちかけたことにはじまります。“南京赤絵系”的技術は、当時の景德鎮の最先端の製品と同様な物
が製作できる技術だったので、まあ、二人占めできればおいしいわけですよ。

あつ！勘違いしないでくださいね。景德鎮と同様なものを製作する技術だったからって、景德鎮
系の技術が導入されたとは限らないですからね。技術の如何に関わらず、そもそも古九谷様式自体
が、景德鎮の同等品製作をコンセプトに開発されたもんですから、似るのは当然ですからね。

たとえば、徳左衛門さんは「四官」さんから伝授されたって言いますが、これは中国の福建地域
とか南のあたりで四男を称する呼び方ですから、技術的には江西省の景德鎮ではなく、福建省の徳
化窯とか漳州窯とかそんなところの可能性はアリアリなわけです。それに、古九谷様式は上絵の青
を使いますが、下絵の染付を使う官窯はもちろん、民窯でも景德鎮ではほぼ使いませんから。

まあ、それは置いといて…。喜三右衛門さんが“南京赤絵系”的技術を確立する以前から、すでに
上絵付けの技法は開発されてましたので、赤絵窯を開発したのは喜三右衛門さんじゃありません。
たぶん、高原五郎七さんってことになりますね。この赤絵窯も中国系の技術なら中国の赤絵窯と同
じ可能性高いよねってことで、かつて、景德鎮で使われた炭窯とかずいぶん頭を悩ませたことがあ
ります。でも、突如ひらめいたら、な～んだそっちかってオチです。従来から日本にあった素焼き
の窯を改良して、それに内窯を加えて赤絵窯にしてたってカラクリです。ですから、バリバリ有田
発のオリジナルな技術です。

楠木谷窯跡では、“南京赤絵系”的技術が確立する以前から、“古染付・祥瑞系”的古九谷様式が作られていました。つまり、喜三右衛門さんは、上絵付けの技術自体はすでに体得していた可能性が高いってことです。

でも、目標とするものを完成するには、素地がね～って感じですかね。どうも従来の技術の製品は野暮ったいってか重いんですよ。もっと、スカッとキレキレのキレイなやつ作らないと…って感じ。でも、泉山の原料ではどうやっても、景德鎮のようなキレキレが作れないんですよ。焼くとへたってしまうので。

ただ、これについては、山辺田窯跡にてだと思いますが、すでにある程度解決方法が見つかっていました。ハリ支えです。山辺田窯跡では、古九谷様式の製品としてはデッかい皿を主に作ってましたから、そのままだと、高台へたりまくりですよ。そのため、陶器質のハリを高台の中に数か所置いて、へたるのを防ぐって荒技を開発したんです。

いや～、何だか調子に乗ってきてしました。続けたいところですが、まだ終わりそうにないので、本日はとりあえずここまでにしときます。（村）

有田の陶磁史（346）

前回は、素焼きのはじまりの話をしてたら終わらなくなってしまいました。でも、もう少し続きの話をしますね。

前回までに、素焼きは喜三右衛門さんちの“南京赤絵系”的古九谷様式の技術の中で誕生したってことをお話ししました。

喜三右衛門さんは、“万暦赤絵系”や“古染付・祥瑞系”的古九谷様式のように、ちょっと器壁に厚みがあって、ちーとばかり野暮ったいような磁器じゃなくて、同時期の景德鎮製品のような、薄くて、白くて、作行もキリッとした製品が作りたかったわけです。でも、泉山の陶石を使うと、薄くすると焼くとへたってしまうんですね。

たしかに東島徳左衛門さんが、作り方は長崎で志いくわんさんから聞いてきてはいたんですけど、その製法でやってもうまくできないんですよ。つまり、最初からどんなものを作り上げるかつてゴールは決まってるんですが、走り出したらいきなりつまづいたみたいなもんですね。原料の違いはいかんともしがたいですから。鮮やかな上絵の赤を出すみたいなんかとは、わけが違いますから。まあ、この赤の話は創作話ですけどね…。

従来は生掛けですから、いきなり登り窯で焼くわけですよ。そうするとへたる…。これ何度か繰り返してたら、たしかに身代が潰れそうになるのも当然。有田には、「窯焼きは三代続かない」って言葉がありますが、時々本焼きの際に不窯（焼成失敗）になるので、身代を潰すってことの例えです。江戸時代には、おおむね窯焚きをするのは2ヶ月に一回程度ですから、3回失敗したら半年分の収入どころか人件費や原材料費から何からですから…、そりや潰れますよ。たとえ生き残っても、次のための資金が回りませんしね。

まあ、ここからはいつもの単なる妄想ですけど、前回枳藪窯跡の出土例から、素焼きは最初は登り窯の一番上の焼成室でしていたかもって話をしました。それで、素焼きを思い付くまでの過程で、喜三右衛門さんも登り窯でいろんな焼き方を試してみたはずですので、焼成不良の焼け損ないにしてしまったこともあったかもしれません。そしたら、結果的にまさに素焼き状態になったりするわけです。案外、喜三右衛門さんは、「これだーっ！！」ってピーンってきたのかもですね。もちろん、何の確証もない妄想ですよ。偶然、「一度低温で焼いたらいいけるんとちゃう？」ってひらめたとか…、まあ、あり得ないことではないと思いますけどね。

普段から焚いてるわけですから、登り窯の一番上の部屋は、下の部屋から段々焚き上げていくと、自然に温度が上がって、素焼き状態になるってことくらいは容易に想像できたはずですからね。それで、最初は素焼きに登り窯が使われたかもってことです。

でも、それを知ると、当然登り窯を供用しているみんなが素焼きをしたいってことになるわけですよ。でも一番上の部屋は一つしかないし、途中の部屋を素焼きに使われると、温度が上がらないので本焼きの方が失敗してしまうって、本末転倒なことが起きてしまうってことになります。これ

じゃ困るので、じゃー、登り窯の焼成室をそっくりそのまま工房内に再現したらって発想は自然に出てきそうですよね。まあ、我ながらすごい妄想だとは思いますが、意外とこんなことかもしれませんよ。

ということで、やっと今のところ素焼きのはじまりで言いたいことが終わりました。次回からは、元の話に戻ることにします。（村）

有田の陶磁史（347）

前回まで、素焼きの話で脱線してましたので、本日は元に戻します。でも、何の話だったっけって思うでしょ？本人だって、すぐには思い出せないので…。

ちょっと前の記事をたどってみたら、あっ！ そうだった、内山に誕生した赤絵屋なるもんは、実は上絵付けだけやってたんじゃなくて、口クロを使わない、土型で作るたとえば人形類とか、そういうものは製土から関わっていた。そこで、でも、じゃあ、土型も焼かないといけないし、製品の素焼きもしないといけないし、本焼きも…。その後は、赤絵屋らしく上絵付けして赤絵窯で焼くわけです。ということで、上絵焼付けはいいとしても、その前の工程はどうやって焼いてたんでしょうねって話をしようとしてたところでした。もちろん、そんなこと記した文献史料なんてありません。

正直なところ、本焼きはどうしてたのかは、イマイチよく分かりません。どっかの窯焼きに委託してたのか、自前で焼こうと思えば、赤絵屋の工房内には、窯といえば赤絵窯しかありませんで、それで焼いたと考えるしかないわけですが、これはちょっとムリかな。炭を燃料とする錦炭窯だと磁器も焼けるってことが、京都だかどっかの古文書に出てきてたんですが、さすがに薪が燃料の窯じゃ、そこまではムリっぽいですね。なので、これは今後の課題かな？

一方、土型や製品の素焼きですが、つまり、これは胎土が磁器質か陶器質かの違いだけで、どちらも素焼きってことです。いくら乾燥はさせるといつても、生地の状態でどっかに焼いてもらいに

持って行くのは、ちとアブナイですね。素焼きした素地でも、落とすと簡単に溶けちゃうから、さすがに生地のまま運ぶのは難しそうです。

でも、赤絵屋にはいいもんがありました。そう、赤絵窯です。日本の赤絵窯は有田が発祥地だと思いますが、これはむかしむかし、どういうものか、さんざん悩みました。色絵の技術は中国系なので、景德鎮のような炭窯かなとか…。そこで、結局たどり着いたのが、それ以前から国内にあった窯の応用ではってことです。以前、古九谷様式のところでもお話ししたような気もしますが、おさらいの意味も込めてもう一度。

現在知られている古い赤絵窯というのは、まあ、近代のものですが、円筒形の窯の横に方形の焚き口を付けたものです。よく、煙管形なんて形容したりもします。燃料は薪です。この窯、よくよく考えてみると、文献史料などにあるどっかで見たことがある窯とよく似てたんです。それが何と陶器の素焼き窯です。外から見たらソックリなんですが、一つだけ大きな違いがあります。赤絵窯には、素焼き窯にはない、内窯なるものがあることです。

ということで、具体的に赤絵窯の構造の説明をしたいところですが、少し長くなりそうなので、次回まとめてすることにします。（村）



有田町歴史民俗資料館に移築した近代の赤絵窯

前回は、赤絵窯の説明をしようと思って、長くなりそうなので止めときました。本日は、たどり着ければ、赤絵窯の構造の話をします。

前回もお話ししましたが、赤絵窯については、近代のものは、今はもう一つも残ってませんが、最近まで現存するものがありました。それから、うちの資料館の敷地内には、以前町内にあった赤絵窯を解体して移築したものもありますので、構造が分かります。近代になって今の構造の窯に突然変化したなんてことは考えにくいので、少なくとも江戸時代の途中からは同じ構造のものが使われてきたんだろうということは想像できます。

でも、そういう構造の窯が、色絵の創始の頃から使われていたのかと言えば、それはまったく分かりません…、でした。もう 30 年以上も前のことですが、はじめて赤絵屋跡の発掘調査をしました。現在の有田郵便局の建て替え工事に伴うものです。現在は赤絵町遺跡という名称を付けていますが、工事してたら色絵磁器がいっぱい出てきたんですよ。

登り窯跡だと、現地に窯壁片とか陶片とか窯道具片、焼土とか、そんなもんが落ちてるので、見慣れてくると、だいたい地表からでも地下に窯があることが分かります。でも、有田の場合、江戸時代以来の町がそのまま引き継がれて今日に至りますので、通常は工房跡があったところは現在でも家屋が建ってますので、かつてどこにどんな施設があったのか、地表からではまったく分かりません。だから、たまたま工事してたら当たったみたいなことでもない限り、発見できないのです。これは別に赤絵屋跡だけじゃなくて、窯焼き工房跡ほかどんな施設でも同じです。

ずっと昔お話ししたことがあると思いますが、赤絵屋跡なんて掘ったって何も出ないよってのが、当時の地元の方々の意見でした。登り窯と違って高温で焼かないので、失敗しないってのが理由です。でも、メチャクチャいっぱい出るわ出るわ…。

ところが、製品は出るのに、なかなか赤絵窯跡が出て来ないんですよ。結局、18 世紀中頃と 19 世紀の窯は見つかったんですが、地面の下の構造だけで、地表上の構造はまったく不明でした。その後、各種の調査をしてみて分かったのですが、そもそも有田みたいなところは、工房内にある施

設はほぼ全滅で、残っていることはめったにありません。というのは、単発的に窯業が営まれたところと違って、有田では連綿と窯業が営まれていますので、廃業したのでその土地は使わずにそのままなんてことはありません。その上、先ほどお話ししたように町の位置が変わっていません。そうすると、家の建て替えの際などには、みごとなくくらいキレイに整地して、新しい家が建てられます。その時に、地表を平らにするために、ごそっと削ってしまうんです。ですから、地表上にあつたものは、何も残らないわけです。発掘調査がすごく難しい土地柄ですね。

ですから、いわば不動産である遺構は期待できないので、動産である出土遺物で考えるしか方法がないんですが、何しろ、赤絵屋跡の調査なんて、当時は有田どころか全国的にも例がないので、まったく参考にできるものがなかったんです。

ということで、赤絵窯の話をしようとしてたんですが、その前振りの話をしてたら、結局窯までたどり着きませんでしたので、また、次回ということで。（村）



赤絵町遺跡の発掘調査区全景

前回は、赤絵窯の構造の説明をしようと思ってて、それが遺跡ではじめて発見された赤絵町遺跡のことなどをお話ししてたら、結局、赤絵窯の構造まではたどり着けませんでした。本日は、その話をします。たぶん…。

前々回、有田の最初の頃の赤絵窯ってどんな構造だったんだろうかと、むかしむかし散々あれこれ頭を悩ませたって話をしました。なにしろ有田の場合は、ずっと同じところに町が所在する関係で、工房跡の地面上の遺構はほぼ残ることがないので、赤絵窯も地面の下の構造は分かっても、肝心の地上に築かれた窯本体はどんなもんだったのかサッパリ分かんないんですよ。景德鎮と同じような炭窯とかいろいろ可能性を探ってみたんですが、結局赤絵町遺跡の調査の際には解明することができませんでした。

でも、その後平成13年（2001）に、またまた偶然に赤絵屋跡かも？ってことを思わせる色絵磁器ゴロゴロの出土が、上有田交番の建て替え工事の際にありました。現在は、幸平遺跡という名称にしていますが、でも、でも…、でも、その名のとおり所在が幸平地区で、上絵付け業者を集住させたってことになってる赤絵町じゃないんですよ。「？？？」ではあったんですが、でも伝えられているところによれば、赤絵町成立当時は赤絵屋は11軒あり、そのうち9軒が赤絵町にあったって話とか、上絵付け業者の創出にあたっては、幸平地区の一角に集住させたため、そのあたりを赤絵町として分割したって話とかですね。そんじゃ、赤絵町以外にあった2軒のうちの1軒かもってことですよね。もともと幸平地区を分割して赤絵町ができたんですね。そう考えれば、話としては別におかしくはありません。

あっ、ついでに、また、ちょっと幸平遺跡発見時の裏話でもしときましょうか。こんなこと、発掘調査報告書とか、ちゃんとした活字では書けませんから、ここだけの話です。実は、遺跡らしきものが発見された時は、当然、工事はもうはじまってたんですよ。そこは別に周知の埋蔵文化財包蔵地じゃなかったので、事前の通知とかは必要ありません。でも、重機で地面をゴソゴソしたら、色絵磁器がゴロゴロ出てきたんですよ。

たしかに文化財保護法上では、遺跡と思われるものが発見された時は、すみやかに発見届ってのを出すことになっています。でも、実際には、バカ正直にそんなもん出す事業者なんていませんよ。それがたとえ、普段は違反者を取り締まる警察であっても…。

でも、色絵磁器が出てるのを、偶然見つけた第三者がいたんですよね。そこで、うちにご連絡いたしましたもんですから、当然、現地に急行します。この時は、赤絵町遺跡の時の経験がありますから、こりや、赤絵屋だわってことになって、さっそく佐賀県警とお話です。でも、警察だってお役所ですから、突然そんなこと言われても、小回りなんてできません。同じお役人ですから、そこんとこはよく存じております。工期は延びる、発掘費用はかかるって、そりや警察からしたらさんざんってか、お役所って年度途中にそういう話されても、補正予算って通常は年に4回しか組めませんから、その間は自動的に工期も遅れるわけですから、すぐには対処しにくいんですよ。でも、まさか警察が法律違反はできませんしね。一番困ったのは、担当の中間管理職の方でしょう。察するところ、法律は破れない、でも、突然上にそんなこと言っても通用するかな？？って感じかな…。

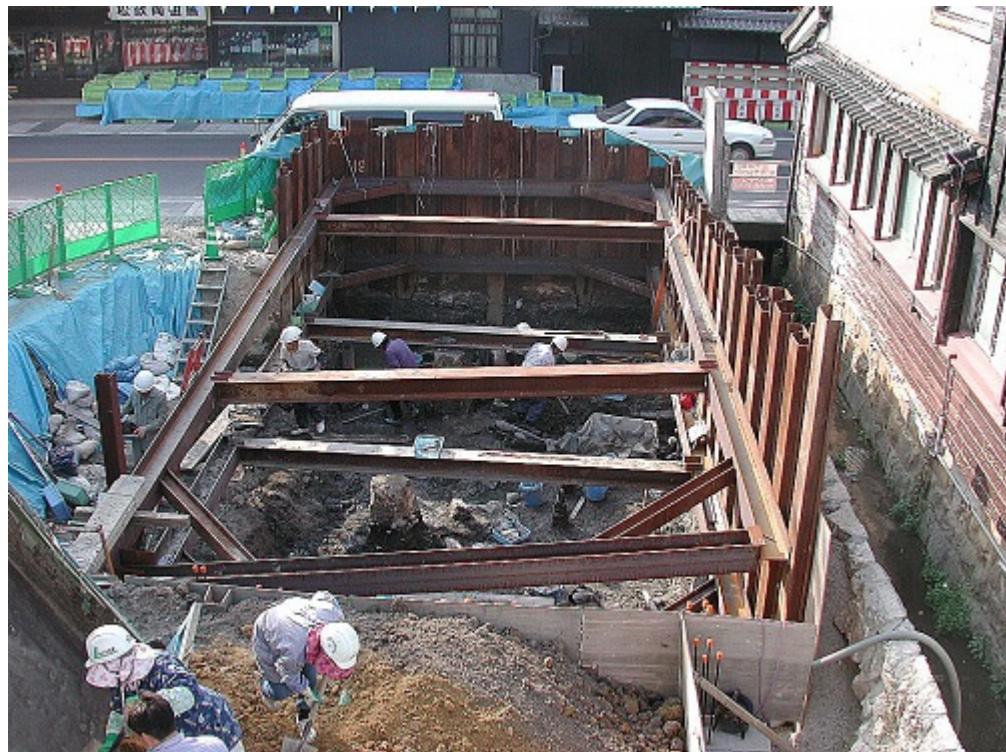
当時は、まだ文化財の地位は、今よりずっと低かったですね。その後、いろいろとマスコミとかに叩かれたもんで、今では少なくとも公共工事とかは、遺跡にかかってないかピリピリしますけど…。

そんで、警察はどうしたと思いますか…？その時は、どうするかまだ最終合意はできてなかったんですが、天下の警察たるもの、そのまま工事を強行するって選択肢もなしってとこですかね。

そしたら、何と翌日の新聞の一面にデカデカと重要な遺跡発見の記事が出たわけですよ。もちろん、こちらはマスコミに何も言ってませんよ。もう、これってピーンッてきましたね。どんな遺跡が発見されたのかってことなんて、うちと警察くらいしか知らないですから。それに、そんな方法うちじゃ思い付きませんわ。普段から、そんな方法を使ってるからこそその発想でしようからね。なるほど、すごく重要で貴重なものにしとかないと予算や工期がね…。いや、たぶんですよ。あえてそんなこと聞くのも野暮ですから。

かくして何とか発掘調査することにはなったんですが、それは有田の内山のど真ん中のことですから、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、内山の家って、人ひとり通れるかどうかってくらいで、隣の家とのスキマがほとんどないんですよ。そんなところで、地面の下を深く掘って掘削した壁面が崩れでもしたら、隣の家もどうにかなっちゃいますよ。そのため、ものすごくジャマとか見栄えも最悪だったんですが、つーか、肝心の土層も見えなくなってしまうんですが、隣の家との境に鉄板を並べて、それを支えるためにぶつとい鉄骨を巡らして、外から見ると発掘現場じゃなくて、まるで土木工事するようにしか見えないって状態で発掘することになったんです。

いや～、ということで何だか思い付きで長々と書いてしまったので、今日も赤絵窯の構造になりませんでした。大変失礼いたしました。次回こそは書きますので…、と、思います。（村）



幸平遺跡の発掘調査区全景

有田の陶磁史（350）

歳取ると月日の過ぎるのが早いなんていいますが、ほんと早っ！！今年もグダグダしている間にいつのまにか、年末になってしましました。今年は役場のHPの全面変更があり、切り替えのため、このブログもちょっとお休みになってしまったこともありましたが、ほんっと、このブログぜんぜん前に進みませんね～。ちなみに、先ほど、今年のはじめにはどこら辺をうろうろしていたのか、一応、確認してみました。何と正月明けに、やっと昨年で古九谷の話が終わりましたみたいなことを書いてました。えっ？？です。自分でも驚きましたが、ということは、まだ内山やら外山やらの成立期の話をしてますので、この1年間で数年分も進んでなかつたんですね。やっぱいっすよ、これ。だって、仮に1年に歴史1年分しか進まなかつたら、有田焼の歴史を話し終わるまでに、約400年かかるってことですからね。話し終わる頃には、また400年の歴史が新たに加わってるってことにもなりますし。まあ、もちろんそれ以前に、そんなに生きてませんけどね。それにしても、この一年、いったい何の話をしてたんでしょうね？？逆に、よくもこんなに引っ張れるもんだと、感心したりもして…。

まあ、こんなことぐだぐだ書いてるとますます進まなくなるので、襟を正して本題に戻ります。つっても、寄り道ばかりするので、本題を思い出すのすら…、そうでした、成立期の赤絵窯の構造の話をするってことで、しばらく脱線してたんでした。

さて、一番最初に赤絵屋跡を調査した赤絵町遺跡では、一応、赤絵窯の床下構造らしきものは確認できたけど、結局、初期の赤絵窯というものがどういう構造のものなのか、皆目見当が付かなかつたって話をしました。つづいて、幸平遺跡でも赤絵屋跡が発見されて発掘調査しましたが、ここでは、赤絵窯の痕跡すら発見できませんでした。つまり、検出遺構からは、まったく赤絵窯についてのヒントは得られなかったんです。でも、そんなこと誰に聞きようもありませんので、自力で解決するしかありません。

あれこれさんざん脳ミソ駆使したものの、何しろ考える材料すらないわけですから、どうにももどかしいというか…。でも、赤絵町遺跡と幸平遺跡には共通して、ほかの工房跡とかにはないもの

があるのに気づきました。それが、何だかへんてこりんな素焼きの甕みたいな遺物です。しかも結構いっぱいあるんですよ。そりゃ有田ですから、やきものの素焼きくらいあっても不思議じゃないけど、でも、有田で甕なんて生産してませんからね。もちろん、水甕や釉薬入れる甕なんか、それから便所甕（お食事中の方は失礼いたしました。）とか、甕はいっぱい使ってるけど、全部武雄とかのやつなんです。

そこで、こそっと話ですが、発掘調査で出土した甕を職場に持つて帰つて、当時だと臨時職員、今だと会計年度任用職員っていいますが、…の方々に洗つてもらうわけですが、絶対便所甕だけは、どういうものかって説明はしないわけですよ。まあ、こちらは知つてゐるわけですが、何も言わないのでおもいやりつてもんですから…。

いや、そんなことはどうでもいいですが…。とにかく、有田では甕なんて焼いてないし、ましてや甕は素焼きなんてしませんからね。それに、口縁部の形はさまざまなんですが、それでも一般的な甕とは形状がちょっと違うというか類例がないんです。そこで、赤絵町遺跡の調査の時には、何だか分からぬままになっていたんですが、幸平遺跡でも同じようなもんが出土したんです。

もう、さんざんつぱら赤絵窯のことを考えてきてましたので、ピーンってきたんです。前回まで説明したとおり、近代の赤絵窯については、構造が判明しています。そこで、常々疑問に思つてゐることがあったんです。それが、内窯、外窯という名称です。前に近代の赤絵窯は円筒形の一方に方形の薪の焚き口を付けた、いわゆるキセル形の窯だつて話をしました。そのキセル形の部分を外窯と呼びますが、その円筒形の部分の内側には、瓦状の粘土板を張り合わせて作った内窯なるものがあります。もちろん、外窯と内窯は一体構造になつており、別々の窯ではありません。ちなみに、外窯は単なる筒なので、底がありません。その筒の中に径が少し小さい内窯が組み合わせられていて、粘土製の柱なんかで底が支えられています。外窯と内窯の間は、トンバイの廃材なんかを縦方向に並べたものを一定間隔でぐるりと配して、粘土で接着してあります。そこで、外窯の焚き口から薪をくべると、直接内窯の底で火が燃えて、熱や煙は、外窯と内窯のすき間に並べたトンバイとトンバイの間を通つて、上方向抜けていく構造です。製品は内窯の中に詰めますが、つまり、

内窯の内部には直接炎が当たりませんので、蒸し焼きみたいな状態ってことです。高温の炎なんて直接当たると、上絵の具なんて、焼き飛んでしまいますからね。

そこで、なぜ別々ではなく一体的に造られているものなのに、内窯、外窯って個別の名称が付いてるんだろうかって常々不思議に思ってたんです。まあ、一般の方からすれば、そんなこと不思議に思う方が不思議だとは思うんですけどね…。まあ、疑問に思ってなんばみたいな商売ですから、職業病かもしれませんね。

それで、前にも少し触ましたが、この赤絵窯は、実は従来から国内にあった素焼き窯とそっくりな外形をしています。唯一の違いが、内窯の部分があるかないかだけです。何度も触れてますが、古九谷様式は景德鎮製品と同等なものをを作るための技術ですから、当然、中国系の技術が導入されています。そのため、当初は赤絵窯も中国系の技術かと思ってたんですが、古九谷様式の技術をいろいろ調べれば調べるほど、意外なくらい中国由来の部分は少なくて、独自の工夫で何とかしている部分が多いんです。だったら、赤絵窯も独自の工夫？って考えたら、な～んだってことに思い当たったんです。素焼き窯の中に、単純に例の素焼きの甕みたいなもんを入れれば、まさに赤絵窯になるじゃんって…。そう考えれば、甕みたいに口がくびれた形状になっているのも、な～るほどです。バカ重いので手では持ち上げられませんからね。たぶん、そのくびれた首の部分に縄でもかけて、滑車か何かで内窯を外窯に出し入れしたんじゃないかと…。

そう思い立ったところで、いっぱい出土しているその素焼きの甕みたいな破片を、詳細に観察していました。「あったーっ！！」って感じですよ。内窯の内部に上絵の具でも付着していないかって調べたわけです。そしたらやっぱりあったんです。

なるほど、これで外窯と内窯が個別に命名されている理由も分かります。だって、もともと取り外し可能な別々の窯だったんですから。

まあ、そのうちお話ししますが、17世紀末頃に、有田では、内山だけではなく、有田皿山全体で上絵付け工程が分業化されます。そこで、その時以来、赤絵屋は上絵専業になって、前にお話ししたような人形類とか、口クロを使わない製品の生産からは撤退します。そしたら、別に製品や土

型の素焼きはする必要がなくなりますから、わざわざ効率の悪い取り外せる内窯も必要なくなってくるわけです。それで、外窯と内窯を一体構造とするようになって、今日知られるような近代の赤絵窯みたいな構造になってきたってことです。

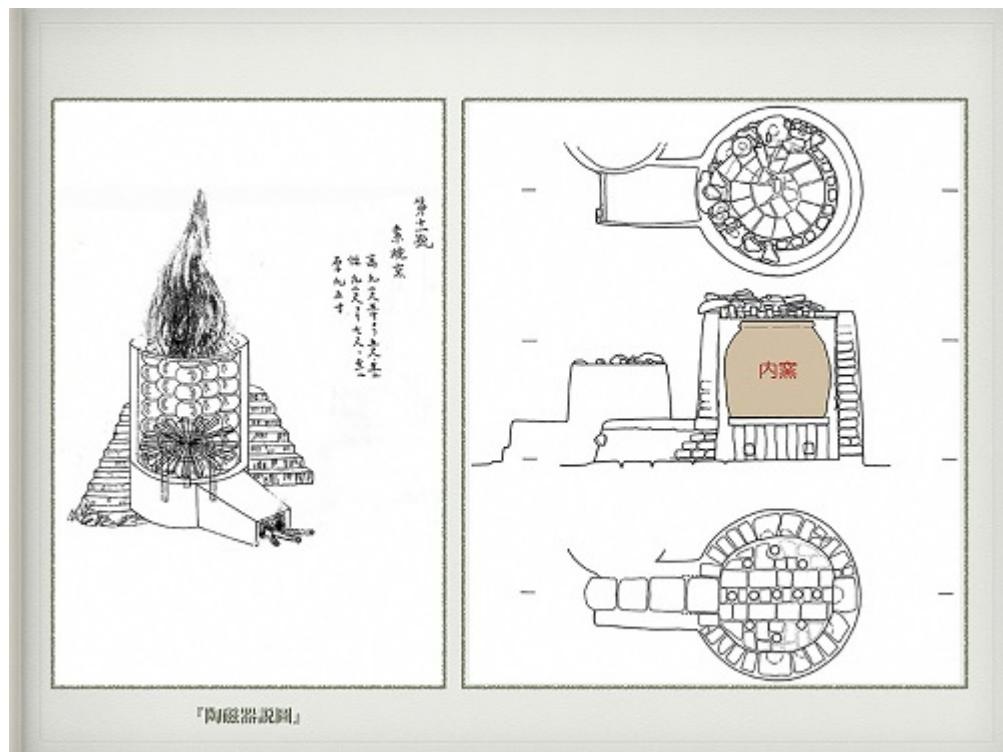
日本の赤絵窯は、有田が発祥地だと思いますが、それが九谷とか京都とかに伝わっていくわけです。でも、有田の場合は、自分ちの事情で、途中から、外窯と内窯を合体させました。でも、それは外部に赤絵窯の技術が伝わった後のことですから、今でも…？？今は薪の赤絵窯なんて使わないとは思いますが、九谷や京都なんかでは近代の赤絵窯の場合でも、内窯は取り外せる構造になってるんです。たぶん、九谷や京都では、有田のように赤絵屋が人形類などの一貫生産なんてしてなかつたと思うので、逆に、本来内窯を取り外す必要なんてないんですよ。つーか、赤絵屋という職業自体、有田独特ですしね。よそでは、有田の最初の頃みたいに窯焼きが上絵付けまで一貫生産しているのならば、別に素焼きは専用の素焼き窯を持つてはるはずですからね。でも、有田から17世紀中頃に伝えられたのは、内窯が取り外せる構造の赤絵窯だったわけです。それを、改良はしたでしょうけど、構造的にはそのまま使い続けて、近代に至ったってことです。

これでやっと赤絵窯の構造が分かるようになったんです。その後、有田の小学校改築の際の試掘調査でも、遺跡そのものはほぼ残ってなかつたんですが、色絵片とかもボチボチ出てきたんですが、やっぱその中に素焼きの甕みたいなんがあったんですね。それから、山辺田窯跡の工房跡である山辺田遺跡の発掘調査の際にも、同じ素焼きの甕みたいなもんがたくさん出てきました。まあ、これで最初は内窯が取り外せる構造だったってことは決定ってことでよろしいかと。

ということで、今回はメチャクチャ長文になつてしましましたが、何とか今年のうちに赤絵窯の構造までは説明しておきたかったので、ふ～っ！てところでしょうか。もうじき年末・年始の休みに入りますので、今年はこれでブログのアップもおしまいです。来年ことは、もそつとは進む…といいな～って思いつつ、それでは皆さま、よいお年をお迎えください。（村）



取り外し式内窯の口縁部から胴上部の破片（幸平遺跡）左：外面 右：内面



和式の素焼き窯の図（左）と、初期の赤絵窯の構造模式図（右）

有田の陶磁史（351）

あけましておめでとうございます。今回は、長めの年末・年始の休みを、過ごされた方も多かったんじゃないでしょうか。まだエンジン全開じゃない方も多いかもしれません、本年もよろしくお願ひいたします。

気付けば、ブログのこのシリーズも、今回で 351 回目を数えるんですね～。いったい、全部でどのくらいの文字数あるんでしょうね？きっと、有田の陶磁史関係の文章としては最長でしょう…、たぶん。でも、まだ 17 世紀中頃の話をしてるんですけどね。もっとも、有田の窯業が一番目まぐるしく変化した時期は一応こなしちゃいましたので、これからはスイスイと進むかも…？まっ、誰も信じないでしようけど…。

まあ、それはさておき、昨年の年末に、何とか初期の赤絵窯の構造について、ムリヤリ話し終えたところでした。結局、有田の窯業って、ほかからポンって技術を入れてきて、いつも難なくその場をやり過ごしているように見えて、意外と努力してるんですよ。いや、見えてるかどうかは知りませんが、少なくとも、よく見る歴史の記述ではそう読めますよね…。

たとえば、磁器のはじまりについても、よく記されているストーリーとしては、朝鮮半島で磁器を作つてた陶工がいました。その人を文禄・慶長の役の際に連れ帰りました。その陶工は常々故国で作つていたような磁器を再現したいって願つてましたが、ようやく有田で磁器の原料を発見して、日本ではじめての磁器製作に成功しました。めでたし、めでたし、…みたいな話でしょ。いや～、長年の苦労が実つて良かったね、みたいな美談。こういうの多いんですよ。でも現実は、日本ではじめて磁器を創始した朝鮮人陶工も、別に故国で作つていた磁器を再現したわけじゃなくて、生活せにやならんので、日本で売れる中国風磁器をやつと開発したって話なわけで…。もちろん、苦労はしてるけど、もっとドライですね。ゲージュツ作品作つてるわけじゃないので。

そんで、でも、そういう美談をずっと刷り込まれると、普通は、あたかもそういう言い伝えでもあったかのように思っちゃうでしょ。それがいつの間にか定説になつたり…。でも、実際は、ほとんど言い伝えなんてないんですよ。『金ヶ江家文書』に、有田を発展させたのは自分の先祖の三兵衛なのに、もうみんな忘れて誰も敬わないやんって嘆いてるみたいな記述があるんですが、まあ、万事がそんな感じ。古文書とか形あるものにして残さない限り、ほぼ残つてません。

そうですね…。一般的に言い伝えって思われてるようなことも大半は近代以降、ほとんどは昭和からの言い伝えですね。これを言い伝えというかどうかは知りませんけど…。考察する資料が少な

くて、いろんな妄想の選択肢があつたことや、研究の担い手の主力だった東京あたりの偉い美術史の大先生方が、有田の美しいやきものを通して、美しい歴史を描いたこと。美術史の方々は、本当に形容詞の使い方がお上手。いや、本当に褒めてるんですよ。でも、時々やってくるお客様に見せるのは、いつも着飾った有田ですけどね。それから、地元の郷土史家の方々が歴史学のお作法に則らないような資料の使い方をバンバンやつたこととかね。だいたいご同業者ばっかギュギュッと圧縮してるように、美しい歴史なんてあるわけないでしょ。良く言えば常に切磋琢磨、常 在戦場ってとこかな。

それでも、『金ヶ江家文書』や『酒井田柿右衛門家文書』とか、文書として残ってるもんもあるやんって思うかもしれません、でも、逆に言えば、それ以外はほとんど残ってないわけで、有田の人は、それは文政11年（1828）の内山の大火で、全部焼けてしまったからだってみたいなことも言いますけど、さすがにマユツバ物かな？？じゃ、焼けなかった外山はどうなんよってことでしょ。

『金ヶ江家文書』や『酒井田柿右衛門家文書』がなぜ残ったかって言えば、そりや、何々を願い出たとかみたいに、官民関係というか、役所とのやり取りあるから残ってるわけですよ。役所との重要なやり取りである、公文を処分できないでしょ。こういうお役所と関わった家の文書が残つてゐるわけで、民民の文書って普通は残らないですね。紙なんて今以上に貴重ですから、リサイクルは当然ですから。だから、今、紹介されてる民の文書もあつたりしますが、ありや、旧家の襖の裏貼りから剥がしてきたもんとか、そんな場合が多いです。

なんてくだらない話をしてたら、今日は歴史の話しに入れませんでした。まあ、正月ですから、慌てず、急がず…。つーか、こんなことしてるから、一向に進まないんだってことは分かってるんですけどね…。（村）

前回は、新年早々、またくだらない話をして、先に進めませんでした。本日より、通常営業を再開します。っても、毎度のことですが、何の話しをしてたんでしたっけね…？？ってことで、前のを探してみました。概略以下のようなことでした。

1650 年代中頃から 60 年代初頭頃に行われた内山の窯業の再編によって、結局、有田全体の窯業地がシャッフルされ、それによりヨーロッパを中心とした海外輸出の拠点ならびに窯業の中心地として位置付けられた“内山”と、それを補完するため山ごとにランク分けされた“外山”という概念が確立したって話でした。そして、高級量産品を生産した内山は、域内の窯場のすべてがあたかも一つの組織のような生産構造となり、上絵付け工程も分業化して、徹底的な効率的な量産体制が図られました。

一方、外山は内山以上に高級品を生産した南川原山や大川内山のごく一部や、内山の一つ下のランクに位置する中級品生産の外尾山や黒牟田山、さらに下ランクの下級品生産の応法山や広瀬山、大川内山などに分けられたってことでした。

そこで、この改革では、外山は内山のように上絵付け工程の分業化は図られなかつたんですが、製品ランク分け生産がはじまつたことで、内山以上に高級品を生産した南川原山と大川内山のごく一部を除けば、結局、まだ当時付加価値の高かった色絵磁器の生産からは撤退してしまつたことになつたんでした。これによつて、かつては外山地域の色絵磁器生産の雄として、まわりの窯場にも大きな影響を与えていた山辺田窯跡の万曆赤絵系の色絵の技術は、山辺田窯跡そのものが内山の上絵付け工程の分業化に伴い崩壊してしまつたこともあり、完全に消滅してしまつたわけです。

一方、上絵付け工程が分業化された内山の色絵は、外山の地域と違つて、喜三右衛門さんちの南京赤絵系の技術の影響が色濃く反映されたものでした。ですから、17世紀後半以降は、喜三右衛門さんち由来の技術は生き残つて、一番幅を利かせたつてことです。もちろん、外山でも南川原山は、内山以上に喜三右衛門さんちの技術のピュアなところですしね。そこで、17世紀後半以降はランク別生産になつたことで、生産品が変遷していく基本的なスタイルは、川上から川下…、つまり

り、より上級な方で開発されたものが、段々下ランクの窯場で、種類は絞られるけど、模されるつて形が基本になるわけです。なので、最高級品を生産した南川原山や、続く内山は喜三右衛門さんちの技術の影響が大きいわけなので、それが外山の中・下級品生産山にも影響を与えるってことになつて、まさに喜三右衛門さんちが天下を取つたみたいな状態になるわけですよ。

唯一の例外が大川内山で、五郎七さんちのごつつきのある古染付・祥瑞系の技術がピュアな形で移植されたわけです。そこで、その技術で日峯社下窯跡で開発されたのが、鍋島様式ってわけです。正確に言えば、喜三右衛門さんちの技術が内山に伝わる直前に、すでに五郎七さんとのこの技術が普及してましたので、喜三右衛門さんちの技術で包み込まれたとはいえ、多少はその残骸が残つています。なので、古九谷様式の技術としては負け組が山辺田窯跡を核とした万暦赤絵系の技術で、大勝ちしたのが喜三右衛門さんちの南京赤絵系の技術で、そこで、天上天下唯我独尊的に脇目も振らずに独自路線を歩んで生き残つたのが、五郎七さんとこの古染付・祥瑞系の技術ってことなわけです。

まあ、こんな話をして、いざ内山の赤絵屋の話に入って、初期の赤絵窯の構造のことにつれたところで終わつてたみたいですね。今回は振り返りで終わつてしまつたので、次回から続きをすることにします。（村）

有田の陶磁史（353）

前回は、何の話をしてたんでしたっけってことで振り返りをしていたところで終わつてました。本日は、その続きです…かな？

1650年代中頃から60年代初頭頃の間の窯業の大再編によって、有田の窯業地がすっかりシャッフルされて、“内山”、“外山”という概念ができて、山ごとに生産する製品ランクが割り当てられたつてことでした。

これでどうなつたかって言えば、有田皿山という単位では、磁器に関しては、一番上ランクから一番下ランクまで、がっちり需要を押さえる体制が完成したってことです。ご要望に合わせて、ど

んなもんでも揃えられますよって具合です。しかも、重要なのは、それぞれの山に専門分野を割り当てたことで、それぞれに最適化された窯業のスタイルを築くことができるわけですから、効率性も習熟度もバッチリって寸法です。これって、なかなか他の産地ではマネできまへんで…。

もっとも、当時は他には有田ほど大きな磁器の産地はないわけですから、マネしようにもできるわけではないんですけどね。でも、先々というか、近い将来は分かりませんから。実際に、有田だって、当初の弱小零細の新興産地だったもんが、磁器を完成させて一発大逆転したわけですからね。だから、他の産地がもしかしたら、グイグイ力を付けてくるかも知れないわけで…。これって、IT 業界で言えば、Microsoft と Apple みたいなもんかな？長く Apple ユーザーやってる方ならご存じだと思いますが、一度潰れかけて Microsoft の支援受けたくらいですからね。まさか、今のような Microsoft を凌駕するような企業に成長するとは、当時は誰も思ってませんよ。だから Microsoft も手を差し伸べたんでしょうけど。スティーブ・ジョブズが戻ってきてから、スケルトンの iMac を皮切りに iPod、iPhone で急成長しましたから。

それはさておき、特に当時の窯業のスケール的には、波佐見なんかが一番ヤバそうですね。実際に、17世紀前半までの波佐見は、ある意味、有田と真っ向勝負の方向で動いてたんです。青磁なんかだと、むしろ有田よりも良質ですしね。

以前どこかでお話ししたかと思いますが、肥前の窯詰め技法は、李朝と同様にランク別になってて、一番いいものはサヤ鉢に入れて焼くってことに触れたかと思います。そうなんですよ。実は、17世紀前半段階だと、波佐見にもフツーにサヤ鉢ってあるんですよ。つまり、上級品も焼いてたつてことです。だから、もともと有田と目指す方向に大きな違いがあったわけじゃないんです。要するに、あとは規模の違いつてことです。

でも、イケイケドンドンしようとしてた矢先に、波佐見にありや？って思わせることがおきたんですね。それが有田で古九谷様式が開発されたことです。従来の初期伊万里様式のスタイルで上から下まで全部作るって約束事が、一変してしまったわけで、上が古九谷様式、下が初期伊万里様式という様式によるランク差が生じたんです。つまり、従来通り上物を作ろうと思えば、古九谷様式

の製品を作らないといけないし、色絵の技法も開発しないといけないわけですよ。古九谷様式の製品を作ろうと思えば、それを構成する、あるいは付帯するさまざまな技法とかも手に入れないといけません。たとえば、ハリ支えの技法とかもその一つかな。そういう細かい部分も含めてってことです。ただし、色絵については、波佐見でも採集品が一つありますので、まったく試みなかつたとまでは言い切れませんが、少なくとも商業ベースに乗せられるくらい、つまり、成功はしてないってことです。

そんで、さらに止めを指したのが、例の喜三右衛門さんち由来の南京赤絵系の古九谷様式の技術です。白くて薄手で、素焼きまでしてますからね。まだまだ甘々だとは言え、この時期にはすでに藩が窯業に介入はしているわけですから、初期の頃ほどには、陶工の人とかが、藩を越えて自由に行き来するってこともできなくなってしまったし。これが有田の中で普及すると、The End ってことです。いや、波佐見でも多少はあがいてはいるんですよ。同じようなものを作ろうと試みてはいるんですが、でも、やっぱ同じようにはできないんだな～。

話がだいぶ大回りしてしまいましたが、そうすると、波佐見はいきなり大胆な方向転換するんですね。それが下級品に絞った生産ってことです。だから、先ほどの話の続きですが、17世紀後半になると、いきなりサヤ鉢がなくなるんです。これって、客観的に、上物からは撤退ってことが分かるわけです。

いわば総合デパート化路線は諦めて、専門店化に舵を切ったってことです。そうしないと、逆に窯業全滅の危機すらあるわけですよ。だって、有田は総合デパートではあるものの、内実は、山ごとに製品ランク別に特化させて、それぞれの専門性を高めてるわけですから。なので、有田の中でもターゲットを絞って狙い撃ちしないと、とてもじゃないけど手が回らない。有田以上に習熟度と効率性を上げないと勝てないですから。それで、下級品生産の山との競争に絞ったってことです。そういう集約型にすれば、逆に生産規模においては波佐見の方が上ですから、互角以上の戦いができるって戦術ですね。

何だか、今日はなぜこういう話なったのか我ながら不明ですが、波佐見と有田の関係について長々とお話ししてしまいました。まあ、こんな話、活字化されてるもんなんてないですからご容赦を…。と言うことで、本日はここまで。（村）